岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 211

塩納森井先遺跡

主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査５

２００７

岡 山 県 教 育 委 員 会

序

本報告書は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築のうち瀬戸IC事業に伴って平成17年度に実施した、岡山市瀬戸町塩納（旧赤磐郡瀬戸町）地内の塩納森井先遺跡の発掘調査の記録です。

美作岡山道路は、岡山県東部の発展に資するとともに、中国縦貫自動車道、山陽自動車道等と県内循環型高速道路網を形成するために県東部を南北に結ぶ地域高規格道路として計画されたものです。岡山県教育委員会では埋蔵文化財保護の観点から本道路建設に先立つ事前の分布調査や確認調査を行い、県の担当部局と協議を重ねてきました。

その結果、やむを得ず工事掘削等によって現状保存が困難な遺跡については、平成９年度から発掘調査を実施し、記録保存の措置を取ってきました。そして、そのうち旧佐伯町（現和気町）、旧熊山町（現赤磐市）、旧瀬戸町（現岡山市）内ですでに調査の終了している遺跡につきましては、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174・178・187・191として、それぞれ平成14・15・16年度に刊行しています。本書は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査報告書として５冊目の刊行となります。

本報告にかかる塩納森井先遺跡は、隣接する白鳳時代創建の吉岡廃寺に関連する遺構の検出が期待されましたが、同時代の遺構は希薄で一条の溝が古代に遡る可能性がある程度で、出土遺物も須恵器片・土師器片・瓦片が少量出土したのみでした。主要な検出遺構は、近年の圃場整備以前に認められた条里制の方位に合う中世から近世の溝や建物群でした。当初想定した古代の吉岡廃寺関連の遺構は明瞭でありませんでしたが、廃寺周辺部には、中世から近世にかけての集落が形成されていたことが新たに判明し、その一部が今回の調査により明らかになりました。

これらの調査成果を掲載した本書が、学術研究に寄与できるだけでなく、吉備地域の歴史解明や文化財保護の一助として、活用される事ができれば、幸いに存じます。

発掘調査の実施と報告書の作成にあたりましては、埋蔵文化財保護対策委員会の委員の方々から有益な御指導と御教示を賜りました。また、岡山県備前県民局、旧瀬戸町教育委員会等の関係者各位、並びに、地元の方々から多大な御理解と御協力を賜りました。末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

平成19月３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　松　本　和　男

例　　言

1　本書は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築のうち瀬戸IC事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県備前県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、塩納森井先遺跡の調査報告書である。

2　塩納森井先遺跡は岡山市瀬戸町塩納230ほか（旧赤磐郡瀬戸町）に所在する。

3　遺跡の名称変更を行った。調査時名称の吉岡廃寺関連遺跡を付近の字名を参考にし、塩納森井先遺跡に変更している。

4　発掘調査は、平成17年４月１日～同年９月30日の期間に岡山県古代吉備文化財センター職員山磨康平、小松原基弘、團奈歩が担当して実施した。調査面積は1,900㎡である。

5　発掘調査および報告書作成にあたっては、「美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、次の方々に委員を委嘱した。保護対策委員各位からは、有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

　角南勝弘（美咲町教育委員長）
　富岡直人（岡山理科大学総合情報学部助教授）
　野崎貴博（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手）
　間壁忠彦（倉敷考古館館長）

6　報告書の作成は、平成18年度に岡山県古代吉備文化財センターにおいて山磨が担当した。

7　主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築事業に伴う発掘調査報告書の第５冊目に当たる。

8　本書の編集は山磨が担当し、執筆は山磨・小松原・平井泰男が分担した。

9　遺構写真については調査担当者が撮影し、遺物写真については、江尻泰幸が担当した。

10　本書に関連する出土遺物・図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標Ⅴ系（日本測地系）の座標北である。

2　本書に掲載の遺構および遺物実測図の縮尺は明記してあるが、基本的には次のように統一している。

遺構

掘立柱建物・柱穴列（1/60）　土壙（1/30）　溝（1/30）

遺物

土器・瓦（1/4）　　金属製品（1/2）

3　遺構配置図のなかに示す遺構名は、次のように略称を用いた。

掘立柱建物：建　　土壙：土　　柱穴列：柱

4　本書に掲載した遺物番号については、土器・瓦と金属製品に分けて通し番号をつけ、 金属製品については、次の略号を付している。

金属製品：M

5　掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、口径が全体の1/6以下のものである。

6　遺構の堆積土層・土器の色調は『新版標準土色帖』による。

7　本書に掲載した第２図は、国土地理院発行の1/50,000地形図の「和気」、第３図は、1/25,000地形図の「万富」・「備前瀬戸」を複製し、加筆したものである。

8　本書に用いた時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、文化史区分・世紀を併用している。土器編年については、岡山県教育委員会が平成７年に発行した「津寺遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98に基づいている。

目　　次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査の経緯と遺跡の環境 …… 1
　第１節　発掘調査の経緯と経過 …… 1
　　１　発掘調査の契機 …… 1
　　２　発掘調査の経過 …… 1
　　３　調査日誌抄 …… 2
　第２節　調査および報告書作成の体制 …… 3
　第３節　地理的・歴史的環境 …… 4
第２章　発掘調査の概要 …… 7
　第１節　遺跡の概要 …… 7
　第２節　遺構と遺物 …… 9
　　１　掘立柱建物・柱穴列 …… 9
　　２　土壙 …… 13
　　３　溝 …… 14
　　４　その他の出土遺物 …… 19
第３章　まとめ …… 20
遺構一覧・遺物観察表
図版
報告書抄録
奥付

図　目　次

第１図　遺跡位置図（1/1,250,000） …… 1
第２図　道路予定路線と調査遺跡（1/50,000） …… 2
第３図　調査地周辺の主要遺跡（1/25,000） …… 5
第４図　調査区配置図（1/1,500） …… 7
第５図　遺構全体・断面図（1/400・1/150） …… 8
第６図　掘立柱建物１・２（1/60） …… 9
第７図　掘立柱建物３（1/60） …… 10
第８図　掘立柱建物４（1/60） …… 11
第９図　掘立柱建物５・柱穴列１（1/60）・同出土遺物（1/4） …… 12
第10図　柱穴列２・３（1/60） …… 13

第11図　土壙１～３（1/30）・同１出土遺物（1/4）…… 14
第12図　溝１～５断面（1/30）・同１出土遺物（1/4）…… 14
第13図　溝６～９断面（1/60）・同６・８出土遺物（1/4）…… 15
第14図　溝10～15断面（1/30）・同15出土遺物（1/4）…… 16
第15図　溝16～19断面（1/30）・同16出土遺物（1/4）…… 17
第16図　溝20・21断面（1/30）…… 18
第17図　出土鉄器（1/2）…… 18
第18図　その他の出土遺物（1/4）…… 19
第19図　吉岡廃寺と調査地位置図（1/3,000）…… 20

図版目次

図版１　１　調査区遠景（南西上空から）
　　２　１区遺構全景（北上空から）
図版２　１　２区北遺構全景（西から）
　　２　２区南遺構全景（西から）
　　３　３区遺構全景（南東から）
図版３　１　掘立柱建物３（北から）
　　２　掘立柱建物５（北から）
　　３　掘立柱建物２（南から）
図版４　１　掘立柱建物４（東から）
　　２　掘立柱建物１（南から）
　　３　掘立柱建物２、溝６・７（南から）
図版５　１　溝８・９付近（南から）
　　２　溝10～15付近（北から）
　　３　溝21（西から）
図版６　１　溝16（南から）
　　２　溝18・19（南から）
　　３　溝１～５（南西から）
図版７　１　土壙３（北西から）
　　２　溝３・４断面（北から）
　　３　出土遺物

表目次

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧 …… 3
表２　遺構一覧・遺物観察表 …… 23

第１章　調査の経緯と遺跡の環境

第１節　発掘調査の経緯と経過

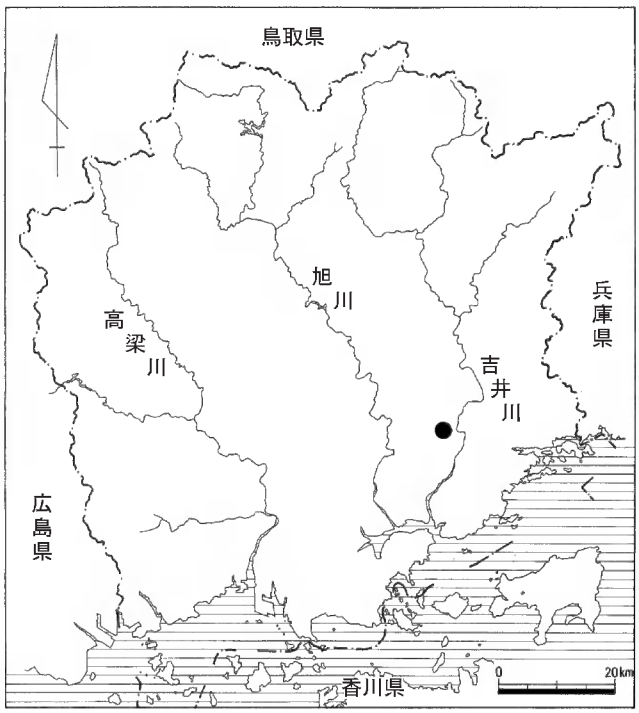
１　発掘調査の契機

塩納森井先遺跡の発掘調査は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築（瀬戸ＩＣ）に伴う調査である。

美作岡山道路に連絡するアクセス道路建設予定地内には鍛冶屋Ｄ遺跡、塩納成遺跡という周知の遺跡が所在していることから、岡山県教育委員会文化財課は事業者である岡山県東備地方振興局建設部（現岡山県備前県民局建設部）と遺跡の取り扱いについて協議を進めていたが、平成16年度に入ってまもなく、文化財課に対して事業者から県道岡山赤穂線～森井池の区間について用地買収がほぼ完了するとの連絡が入った。この連絡を受けて文化財課では現地踏査を実施するとともに事業者との間で、県道岡山赤穂線～森井池の区間に周知されている鍛冶屋Ｄ遺跡については事前の発掘調査が必要であること、また吉岡廃寺跡の南地区（塩納森井先遺跡）については周知されてはいないが関連する遺跡が存在する可能性があるので発掘調査の対象とする必要があること等について協議を開始した。

協議の結果、工事の着工時期を考慮して、平成17年度４月から両遺跡とも本発掘調査を実施することとなった。

なお塩納森井先遺跡と鍛冶屋Ｄ遺跡は同じ道路建設に伴う発掘調査ではあるが、予算上の区別から異なる二つの事業として実施することとなった。　　（平井）



第１図　遺跡位置図（1/1,250,000）

２　発掘調査の経過

調査区の現状は、昭和50年代後半の圃場整備により東西100m、南北45mほどの１枚の水田に整備されていた。圃場整備前の測量図によると、南北に高低差のある３枚程の水田に分かれていたようで、これらの旧田面の高さと、整備後の現状等からかなりの削平を受けているものと予想された。

発掘調査は、表土・造成土等の掘削排土の調査区内での処理の必要等から調査区を大きく３区分し、調査区中央の１区より調

査を開始し、１区隣接の３区西端部、２区、３区の順で調査を行った。

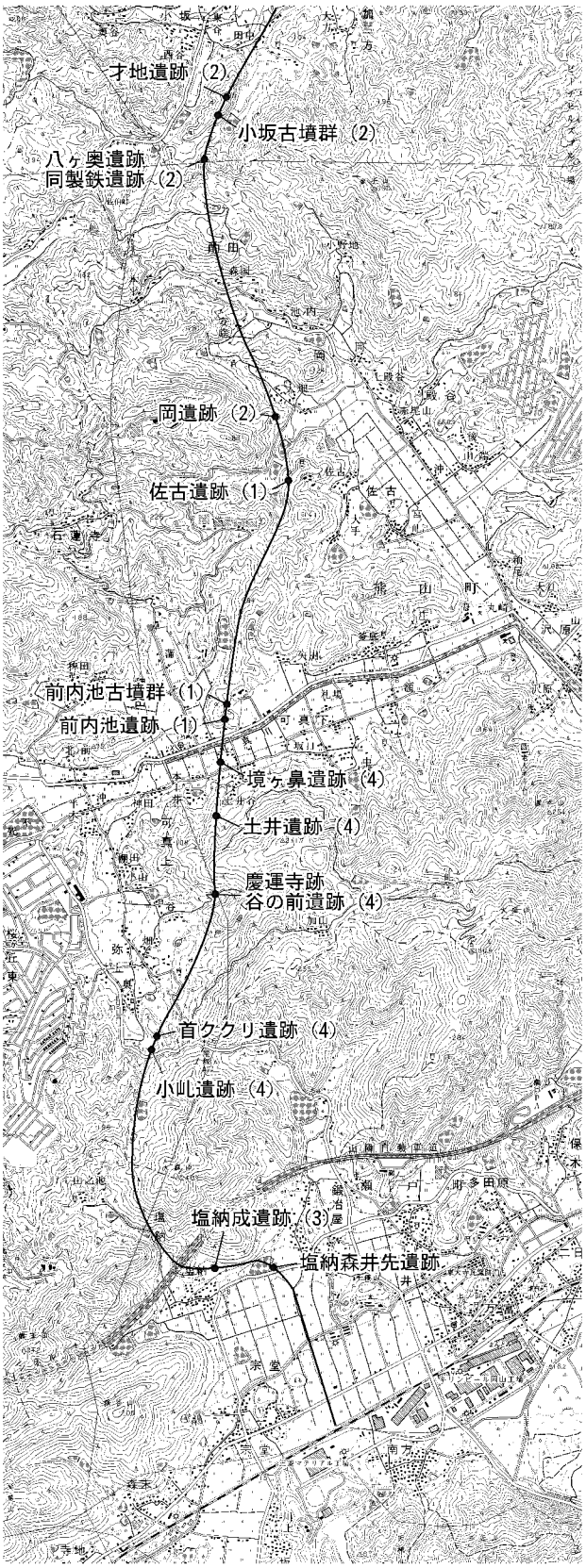
また、休憩テント、器材小屋、資材置き場等の確保のために調査区に隣接する水田に借地を確保した。表土掘削の状況では、予想通り調査区北端では、耕作土直下でかなり削平を受けた基盤面が露出した。調査区中央付近から南では、中世包含層が残存し、圃場整備前の旧地形をわずかに保っていた。また南端付近では、圃場整備によるかなり厚い造成土が耕作土直下に認められた。この状況は西側の２区でも同様であった。また、２区西端では、幅３ｍほどの南北方向の旧用水路が残存し、それより西側では遺構は全く認められなかった。

東端の３区は、現道の北側に並行する幅５ｍ、長さ40ｍほどの狭小な調査区で、圃場整備による削平を受けているものの旧地形がわずかに認められた。

１区の調査がほぼ終了した時点で、遺構の遠景・全景の空撮をラジコンヘリにより行った。７月７日には、美作岡山道路関連の埋蔵文化財保護対策委員会が勝央町調査事務所で開催され、当該遺跡の発掘調査状況報告と調査の指導と助言等を受けた。８月末にて発掘調査を終了し、その後、整理作業と調査区の埋め戻しを行い、９月末にて調査事業を終了した。　　（山磨）

３　調査日誌抄

平成17年４月１日　調査準備開始
４月６日　重機による表土掘削開始
４月11日　現場設営・１区開始
４月21日　調査工程等現地協議
５月24日　ラジコンヘリによる空撮
５月25日　３区開始
５月26日　１区終了
６月８日　２区開始
７月７日　埋蔵文化財保護対策委員会
７月28日　２区終了
８月19日　現場資材撤収
８月30日　３区終了
９月30日　実測図・写真整理作業終了
埋め戻し・調査事業終了



※遺跡名の後の（　）内は、本事業報告書シリーズ番号

第２図　道路予定路線と調査遺跡（1/50,000）

第２節　調査および報告書作成の体制

平成17（2005）年度

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野　正司

岡山県教育庁

教育次長　釜瀬　　司

文化財課

課　　長　芦田　和正
参　　事　田村　啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）
平井　泰男
主　　任　小林　利晴
主　　事　金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　松本　和男
次　　長（総務課長）　内田　　猛
参　　事　平松　郁男
参　　事　高畑　知功
〈総務課〉
総括副参事（総務班長）　若林　一憲
主　　任　小川　紀久
〈調査第三課〉
課　　長　中野　雅美
総括副参事（第二班長）　山磨　康平
（調査担当）
主　　査　小松原基弘
（調査担当）
主　　事　團　　奈歩
（調査担当）

平成18（2006）年度

岡山県教育委員会

教 育 長　門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長　神田　益穂

文化財課

課　　長　高畑　知功
参　　事　田村　啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）
光永　真一
主　　任　小林　利晴
主　　任　金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　松本　和男
次　　長（総務課長）　安西　正則
参　　事　岡田　　博
副 参 事　中島　謙次
〈総務課〉
総括副参事（総務班長）　若林　一憲
主　　任　小川　紀久
〈調査第三課〉
課　　長　平井　泰男
総括副参事（第一班長）　内藤　善史
副 参 事　山磨　康平
（整理担当）

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の報告（法第99条／旧法第58条の２）

文書番号 日　付	種類および名称	所在地	面積（㎡）	原　因	報告者	担当者	期　間
岡吉調 第38号 H17. 4. 11.	散布地・吉岡廃寺	赤磐郡瀬戸町塩納 230ほか	2,300	道路建設	岡山県古代吉備文化財センター所長	山磨康平 小松原基弘　團奈歩	H17.4.11～H17.9.30

埋蔵文化財発見通知（法第100条／旧法第59条）

岡山県文書 番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文理 第608号 H17. 9. 1.	土器・瓦・金属器 10箱	赤磐郡瀬戸町塩納 230ほか	H17.4.11～ H17.8.30	岡山県教育委員会 教育長　宮野正司	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター

第３節　地理的・歴史的環境

塩納森井先遺跡は、岡山市域の東端部にあたる岡山市瀬戸町塩納230番地ほか（字森井先）に所在する。調査時には赤磐郡瀬戸町大字塩納230番地ほかで、平成19年１月22日付で岡山市に編入合併となった。遺跡の所在する旧瀬戸町塩納および鍛冶屋は、明治22年には磐梨郡内の吉岡・太田村に属し、明治33年に赤坂郡と磐梨郡との合併により誕生した赤磐郡となり、昭和７年には万富村、昭和26年に万富町、その後、一部の分離編入を得て、昭和30年の周辺４町村が合併し瀬戸町となり今日に至っていた。今回の平成の大合併により岡山市に属すこととなった。

遺跡の所在する塩納・鍛冶屋地区は、岡山県南東部の南北1,5km、東西２kmほどの狭小な盆地状の平野部に位置する。東側には岡山県下三大河川の一つである吉井川が北から南にＳ字状に貫流し、平野南半には東流する瓜生川が万富付近で吉井川に合流している。平野北側には、大盛山（標高350,9m）・大森山（標高241,9m）の山塊が連なり、南側は 三谷山（標高200m）・龍王山（標高177,4m）の山塊により画されている。西は狭小な浅い谷により旧瀬戸町中心部の沖積低地に繋がり、岡山の平野部へと至る。

旧瀬戸町内の遺跡は、平成10年度より行われた県教委による詳細分布調査による成果では、旧石器時代以降の遺跡が現在369か所周知されている。そのうち旧町域北東部にあたる万富地区では、170か所の遺跡数が知られている。その内訳は古墳時代と古代、中世の遺跡が顕著である。町域内での本格的な発掘調査は、昭和48年から行われた団地造成に伴う陣場山遺跡群の調査である。その後、山陽自動車道、美作岡山道路、圃場整備、団地造成等での緊急調査や史跡整備に伴う万富東大寺瓦窯跡の発掘調査が行われている。

今回調査を行った塩納森井先遺跡周辺部では、塩納成遺跡から旧石器時代の遺物が出土し、付近からも旧石器から縄文時代の石器が出土している。弥生時代には、同じく塩納成遺跡での調査から弥生時代中期を中心とする竪穴住居、建物、溝、土壙等の集落跡を検出し、石器の製作所跡であることも判明した。平野周辺部の丘陵では、中期以降の弥生土器の散布地や石器の採集地が坂根、宗堂等で点々と周知されている。千種山周辺でも古くより石器、土器が採集されている。南方片山では、昭和38年の調査で壺棺が出土し、方形台状墓も発見されている。この他、徳富の仲尾古墳群、宗堂の新田山等に方形台状墓と見られる墳墓群が築かれている。

古墳時代前半期には、弥生時代後半期の墳墓群に引き続いて丘陵部に古墳群が築かれている。前方後円墳は未確認であるが、宗堂の妙泉寺跡には、兵庫産竜山石の石棺が手洗いと題目石に転用されている。後期古墳は、保木の旧熊山町境には横穴式石室墳が20基以上の群集をなし、鍛冶屋の標高250m付近の旧熊山町加山境には地区最大級の直径約19m、高さ３m程の経畦古墳（横穴式石室）が築かれている。後期の古墳分布は、前半期古墳とは際だった特色をなしている。

古代においては、備前国磐梨郡のうちの礒名郷に比定されている。ただこの付近の備前東部地域は８・９世紀代の文献によると複雑に郡名、郡境が変更された地域としても周知されている。もともとは上道郡に属し、その後、和気郡の前身である藤野郡に編入され788（延暦７）年和気郡のうちの吉井川以西の和気、石生、珂磨、肩脊、礒名、物理の６郷を割いて磐梨郡がたてられたものである。中世には吉岡荘に属し、15世紀には三昧院領であったことが記されている。

1．塩納森井先遺跡（古代～近世）　2．弥上古墳（古墳－陶棺山上）　3．絣畦古墳（古墳－径19.5m）　4．扇畑窯跡（鎌倉）
5．尾坂北古墳（古墳－陶棺）　6．辛音口古墳（古墳－陶棺）　7．辛音口製鉄遺跡（時期不明）　8．西奥行畠窯跡（鎌倉）
9．倉谷窯跡（鎌倉）　10．幸音口窯跡（鎌倉）　11．一の谷製銅跡（鎌倉）　12．肥前格坊窯跡（鎌倉）　13．建旗窯跡（鎌倉）
14．仲尾古墳群（古墳－９基）　15．山の谷古墳（古墳）　16．保木城山城跡（室町）　17．岩尾古墳群（古墳－30基）
18．丸尾奥池遺跡（平安・鎌倉）　19．松尾窯跡（台敷）　20．保木池じり遺跡（室町？）　21．保木西遺跡（室町？）
22．保木風呂屋遺跡（鎌倉－館跡か）　23．西ヶ坪古墓（鎌倉・室町）　24．保木城の砦跡（弥生～室町）
25．経塚墳墓郡（弥生－特殊壺・特殊器台）　26．東大寺瓦窯跡（鎌倉）　27．万富上の山窯跡（鎌倉）　28．上の山遺跡（弥生～室町）
29．千種山遺跡（弥生～江戸）　30．鍛冶屋Ｄ遺跡（飛鳥～室町）　31．人井西池遺跡（弥生・奈良－一彩陶器）
32．横の坊遺跡（製鉄－鎌倉）　33．五反河内製鉄遺跡（時期不明）　34．古岡廃寺（奈良）　35．大谷窯跡（鎌倉）
36．塩納成遺跡（旧石器～室町）　37．妙見堂窯跡（鎌倉）　38．勘定口２号墳（陶棺山土－鉄滓）　39．七ツ石１号墳（古墳）
40．勘定口窯跡（鎌倉）　41．塩納大Ｈ遺跡（平安・鎌倉－館跡？）　42．ばかしょ窯跡（鎌倉）　43．石棺（竜山石）
44．散布地（製鉄跡－鎌倉）　45．妙興廃寺（飛鳥・奈良）　46．夏井遺跡（平安～江戸）　47．新田山古墳群（弥生～古墳－5基）
48．馬塚遺跡（古墳・鎌倉）　49．片山古墳群（弥生～古墳－9基）　50．散布地（古代）　51．金山遺跡（製銅－鎌倉～江戸）
52．五反田廃寺（飛鳥）　53．寺山古墳群（古墳－2基）　54．藁菰古墳群（古墳－5基）

第３図　調査地周辺の主要遺跡（1/25,000）

この地区には、古代寺院跡が３か所知られており、また、窯業と鉄生産という二つの産業が集中し行われていることも特徴として揚げられる。その一つが当該遺跡に隣接の白鳳時代創建の吉岡廃寺である。調査結果では一町四方の寺域をもち、法隆寺式に近い伽藍配置を想定し、平安時代初めまで存続したことが明らかになっている。その一角には瓦窯も知られている。

窯業では、古墳時代後半以降の須恵器生産地の一つである磐梨古窯跡群の一角に所在し、地区北側の大森山と大盛山南山麓に中世前半期に集中する窯跡が現在12か所ほど確認されている。万富には、国指定遺跡の万富東大寺瓦窯跡が知られており、史跡整備のための確認調査から計10数基のロストル式平窯が確認され、付属する建物、工房や備前焼窯、土師質焼成窯も検出されている。

また、旧瀬戸町内の広い範囲で鉄生産が行われたことを示す鉄滓の散布も数多く知られている。調査件数が少なく時代の特定は難しいが、隣接する旧熊山町では、古墳時代後半期（６世紀後半）の弥上古墳や小丸山古墳の前方後円墳から鉄滓が確認されている。土井遺跡では、同時期の製鉄関連の鉄滓を伴う焼土壙、竪穴住居が、吉井川左岸の猿喰池遺跡では７世紀代に比定される製鉄炉の遺構が検出されている。当該地域にも、保木、多田原、鍛冶屋、塩納、宗堂、森末等の丘陵部に鉄滓の散布地が知られ、古墳時代後半から中世にかけて鉄生産が盛んであった地域の様子がうかがわれる。また、鍛冶屋付近は古備前刀の吉岡一文字派の居住地であったとも伝えられている。南方の金山遺跡は、近くに銅の採鉱跡があり中世の精錬跡と周知されており、大森山山塊からも銅生産関連の銅滓の散布が知られている。

塩納森井先遺跡の所在する当地域は、山塊と河川により画された狭小な地域にもかかわらず、古墳時代後期には古墳の築造が顕著となり、古代には複数の寺院の存在や磐梨郡の官衙跡と推定される散布地が知られ、政治経済の中核地をなしていたと推察される。また、古墳時代以降の磐梨古窯跡群の一角でもあり、鉄および銅の生産遺跡も数多く知られ、窯業と鉄・銅の生産遺跡においても特色ある地域をなしている。（山磨）

主要参考文献

岡山県赤磐郡太田村・吉岡村立千種尋常高等小学校組合『太田吉岡村誌』 1924
荒木誠一『改修赤磐郡史』赤磐郡教育会　1940
永山卯三郎『岡山県農地史』岡山県　1952
『岡山県市町村合併誌』総編　岡山県　1960
石井寛監修『岡山県の地理』 1978
瀬戸町史編纂委員会『瀬戸町史資料集』　瀬戸町　1984
瀬戸町史編纂委員会『瀬戸町誌』瀬戸町　1985
吉田晶『吉備古代史の展開』塙書房　1995
『改訂　岡山県遺跡地図』〈第９分冊　東備地区〉岡山県教育委員会　2003

第２章　発掘調査の概要

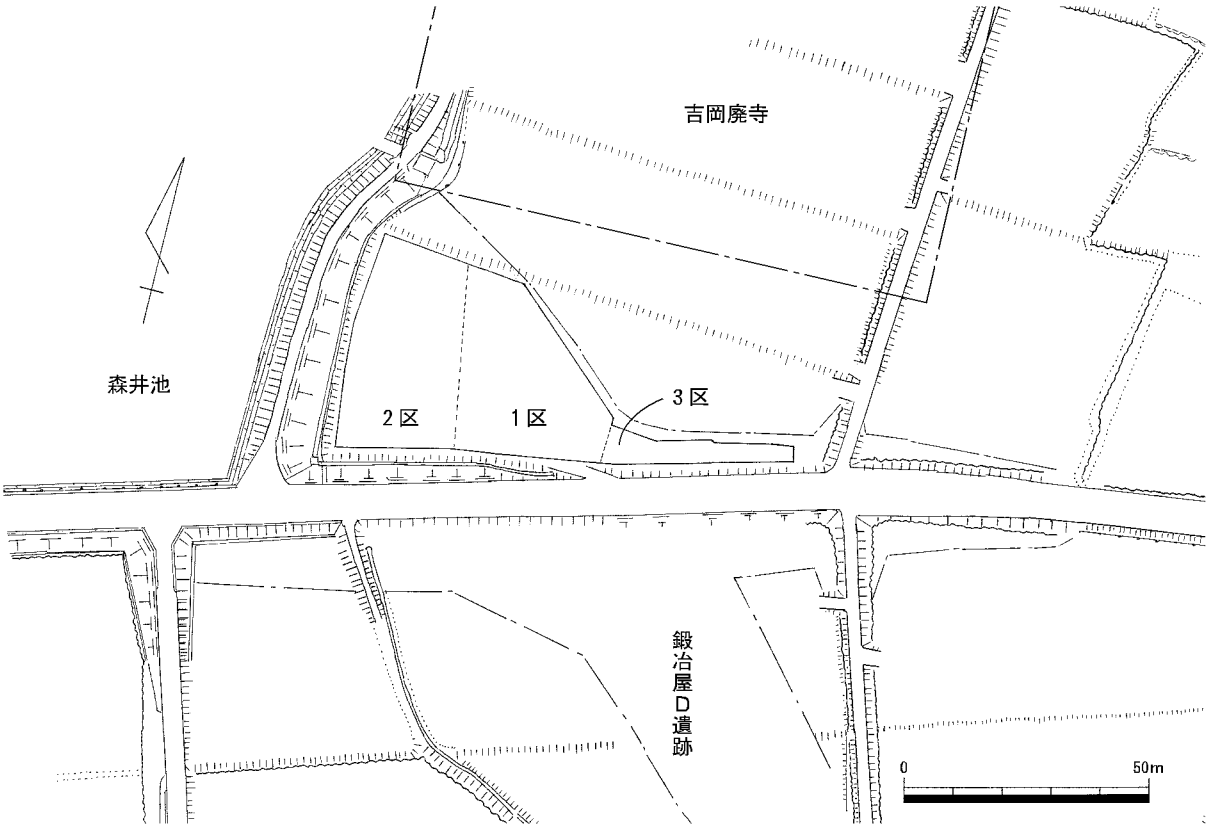
第１節　遺跡の概要

塩納森井先遺跡は、東西100m、南北45mほどの圃場整備された水田の南側と西側の1,900㎡を調査対象とした。調査区北側20mほどの場所が吉岡廃寺の推定南門付近に相当し、西側に森井池、南側に市道が位置する。

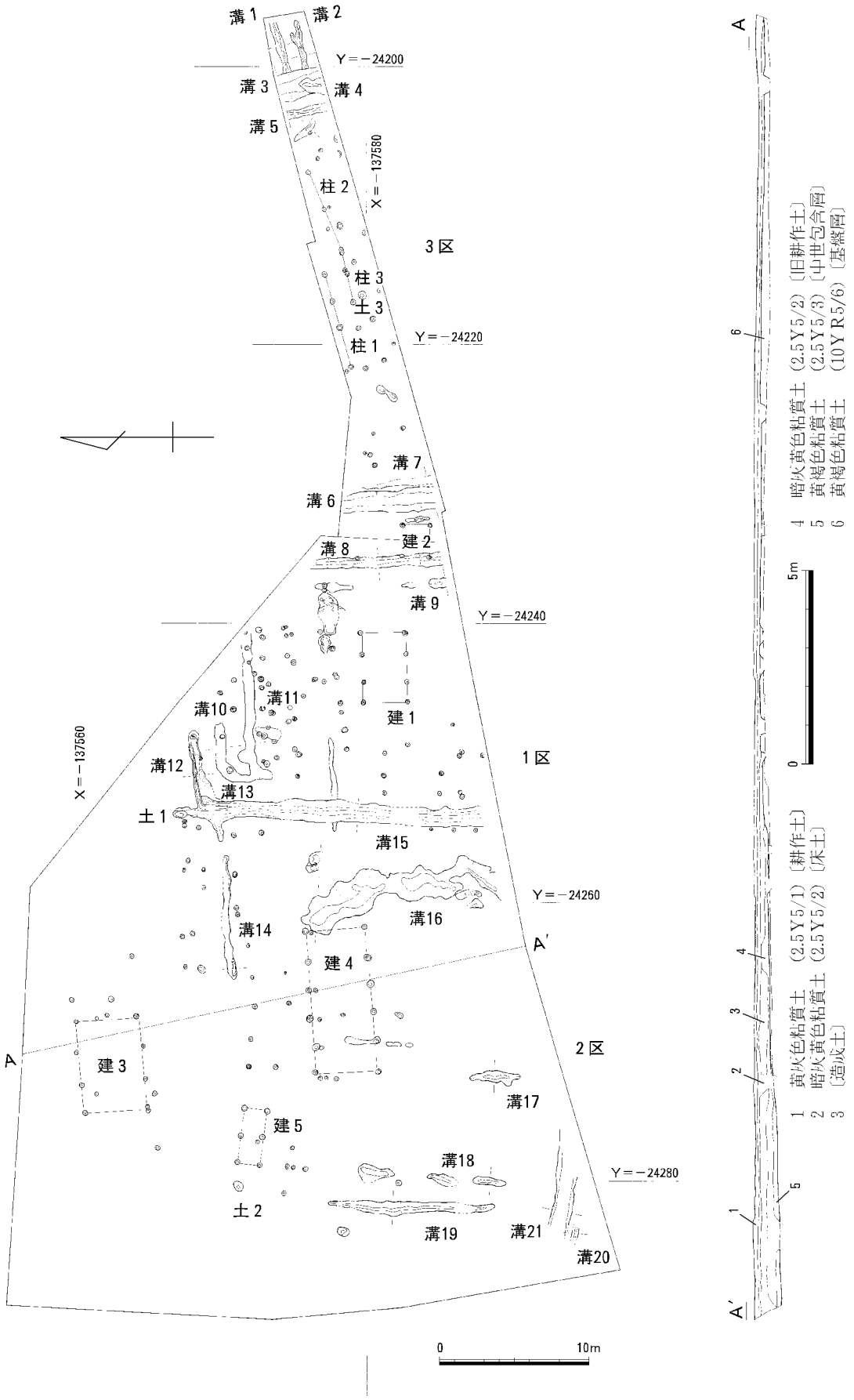
１・２区の北端では、圃場整備により基盤層がかなり削平を受け、ほとんど遺構は検出できない状況であった。調査区中央付近から南には、耕作土直下に黄褐色粘質土の中世包含層が認められた。この包含層は基盤面の南への下降に伴い徐々に厚くなり、南端では厚さ25cmほどの堆積をなしていた。また、圃場整備による造成土が南端付近で最大65cmほど盛られていた。

東西に長い３区では、圃場整備による削平を受けていたものの、基盤面が若干西側に傾斜する程度でほぼ水平な面をなしていた。

遺構は中世から近世の掘立柱建物５棟、柱穴列３列、土壙３基、溝21条等を検出した。出土遺物は、中世後半から近世初頭のものが大半を占めるが、１・２区の溝や風倒木痕からは弥生土器、古代の須恵器等も若干認められた。ただ、吉岡廃寺の存続期間に関連する遺構は不明瞭であった。　（山磨）



第４図　調査区配置図（1/1,500）

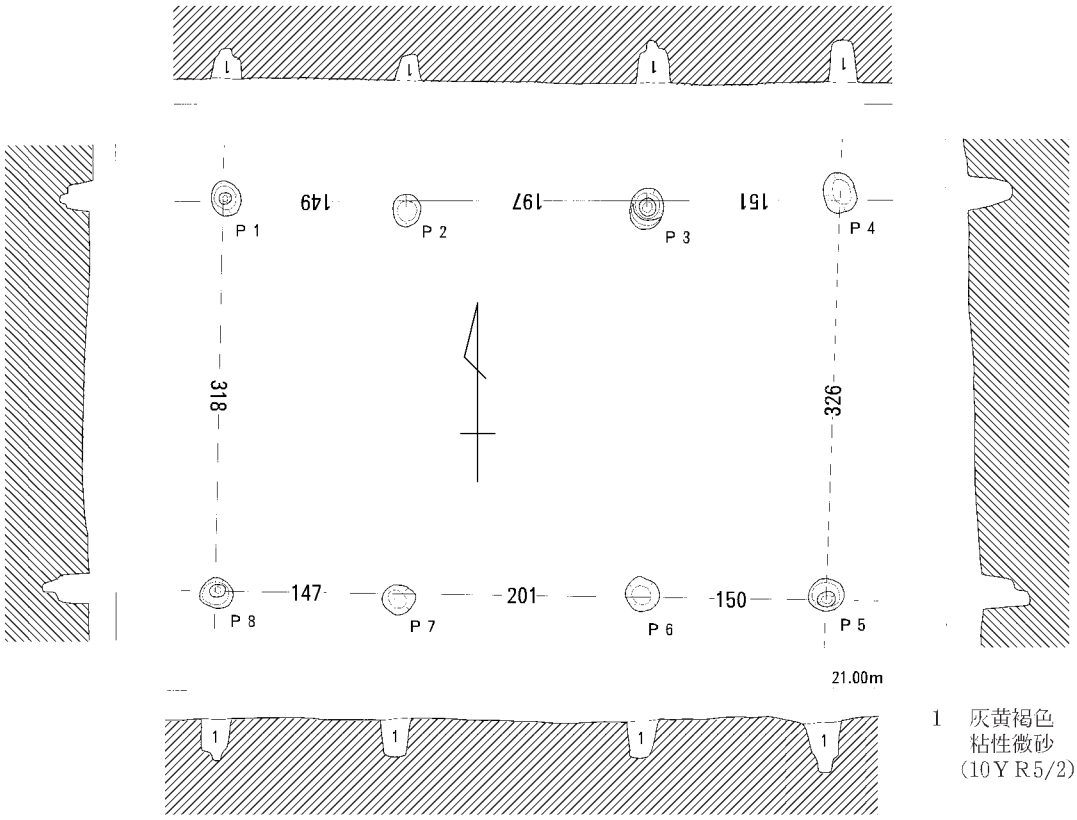


第５図　遺構全体・断面図（1/400・1/150）

第２節　遺構と遺物

１　掘立柱建物・柱穴列

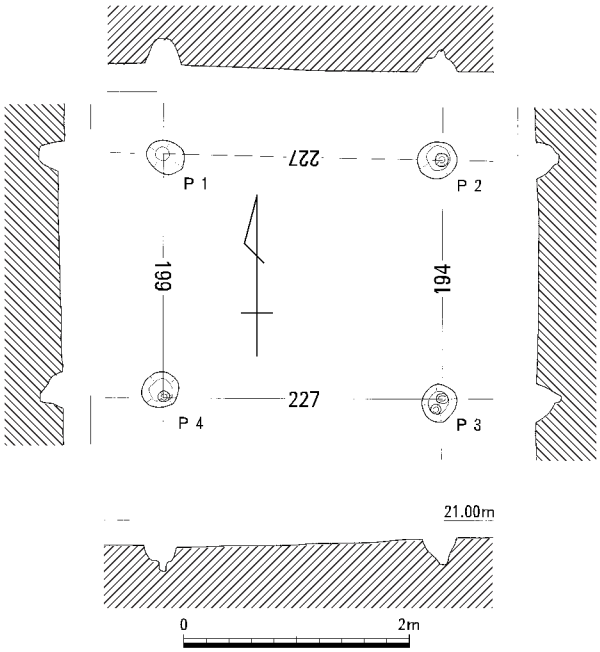
掘立柱建物１（第６図）



１区東、溝８・９の西に位置する。１間×３間の掘立柱建物である。桁行498㎝、梁間326㎝である。柱穴の径は24～28㎝、残存する深さは21～43㎝で、底面はほぼ同一レベルである。柱間距離は南北318～326㎝、東西147～201㎝。棟の主軸はＮ－89°－Ｅで、溝８に平行して建つ。出土遺物は少量で、中に古代の須恵器が混じっている。溝８と同じ土質・色調の埋土である。埋土の状況などからこの建物の時期は中世と考える。

掘立柱建物２（第６図）

１区と３区の境に位置する。１間×１間の掘立柱建物である。桁行227㎝、梁間199㎝を測る。柱穴の掘り方は円形で直径は30～32㎝、

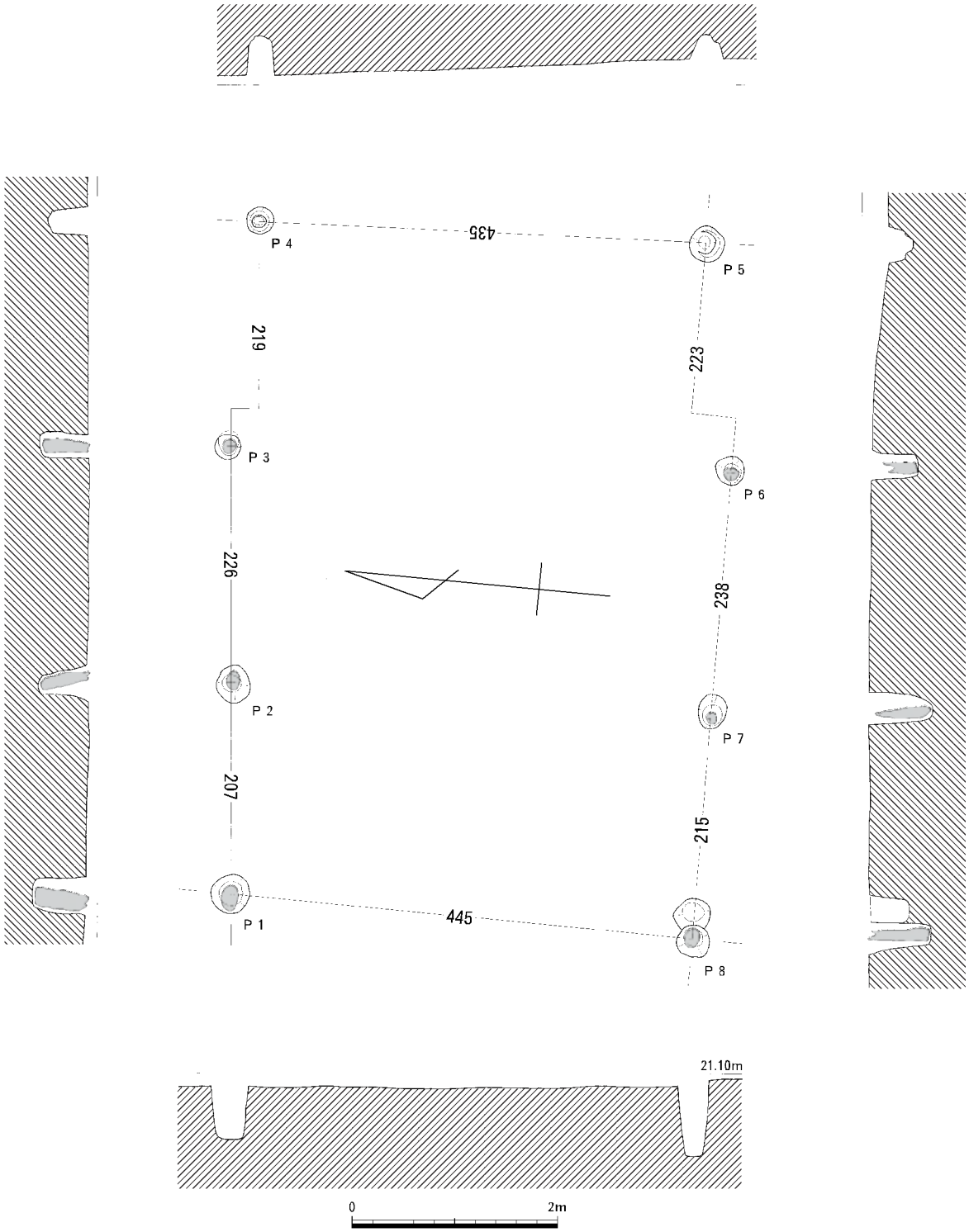


第６図　掘立柱建物１・２（1/60）

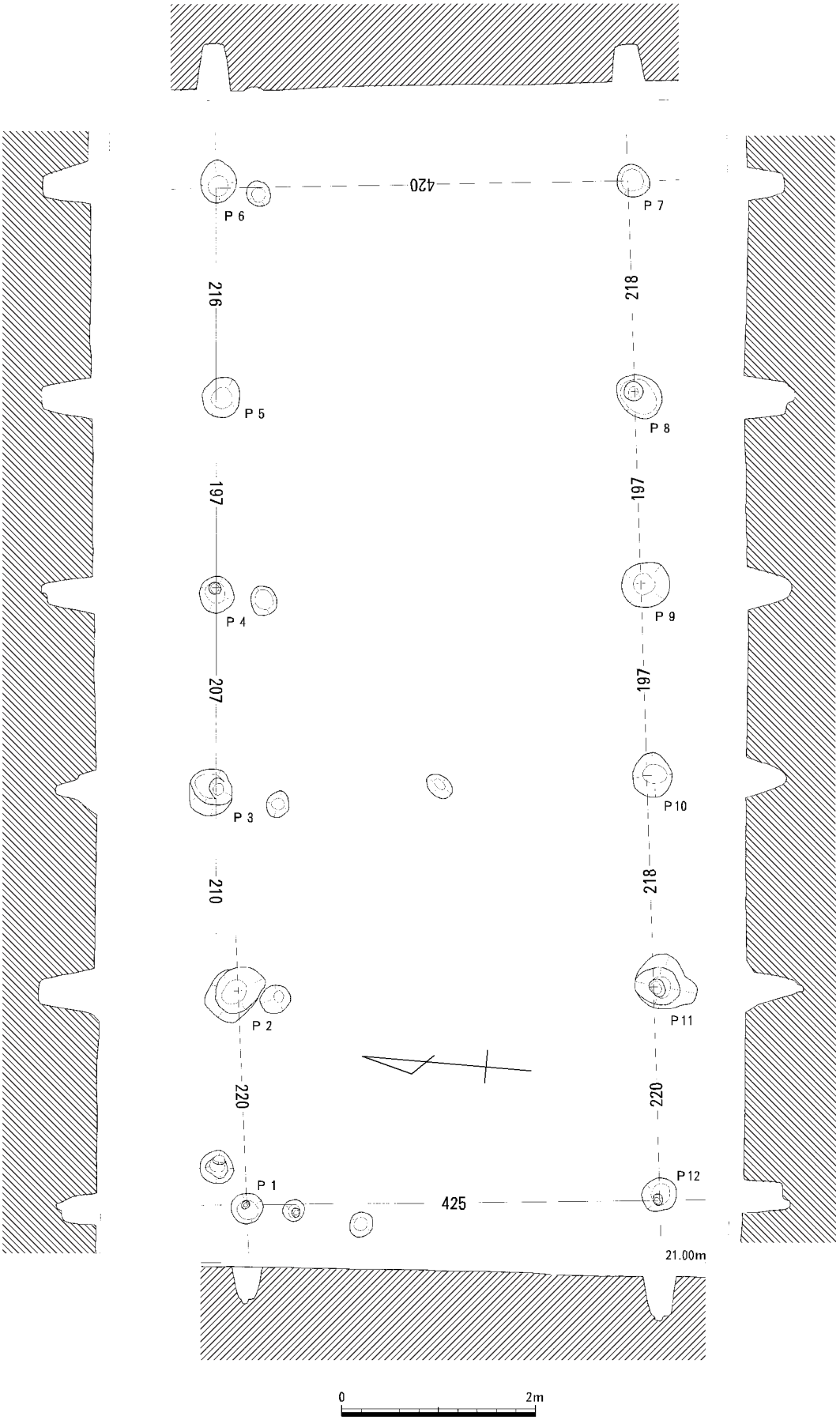
残存する深さは20㎝である。出土遺物はないが、溝６、溝７に付随する施設と思われ、時期は近世と考えられる。

掘立柱建物３（第７図）

２区中央に位置する１間×３間の掘立柱建物である。桁行678㎝、梁間445㎝を測る。柱穴の掘り方は円形で直径は25～38㎝、残存する深さは45～65㎝である。６本の柱穴で柱の根元が残存する。柱間



第７図　掘立柱建物３（1/60）



第８図　掘立柱建物４（1/60）

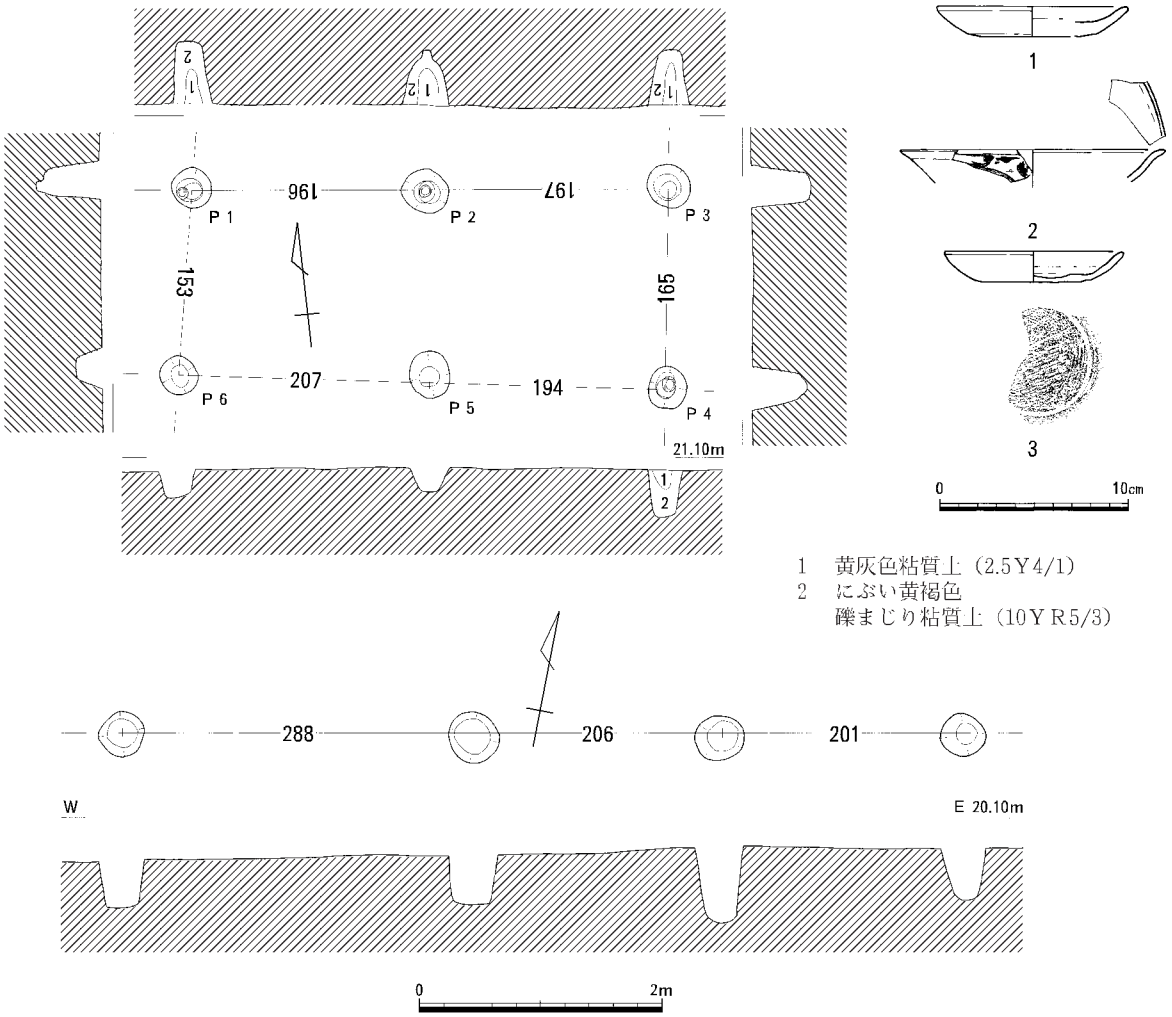
距離は南北435～445㎝、東西207～238㎝。棟の主軸はＮ－84°－Ｅで、棟方向を建物４と同じくして建つ。出土遺物は中世の土師器破片少量であるが、埋土の土質・色調から見て、時期は近世と考えられる。

掘立柱建物４（第８図）

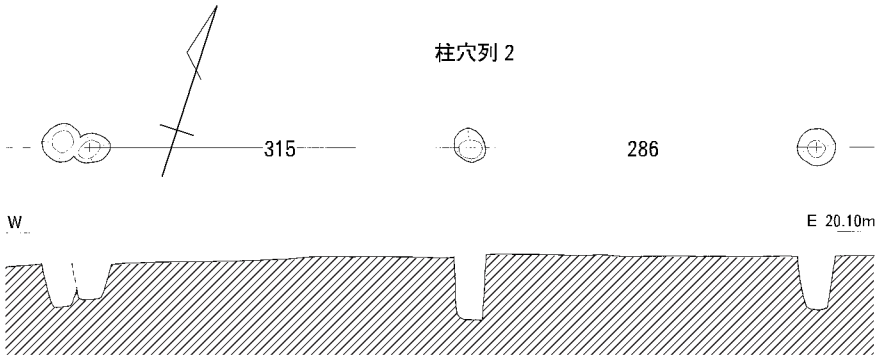
１区と２区の境に位置する。１間×５間の掘立柱建物である。桁行1050㎝、梁間425㎝を測る大形の建物である。主軸の方向はＮ－85°－Ｅで、溝14や建物３とほぼ平行して建てられている。柱間距離は南北420～425㎝、東西197～220㎝。柱穴の掘り方は円形で、直径は34～54㎝、残存する深さは42～60㎝である。出土遺物には中世と思われる土師器の破片が多くみられ、他に備前焼が混じる。１は土師器の小皿である。埋土の土質・色調から見て、建物の時期は近世と考えられる。

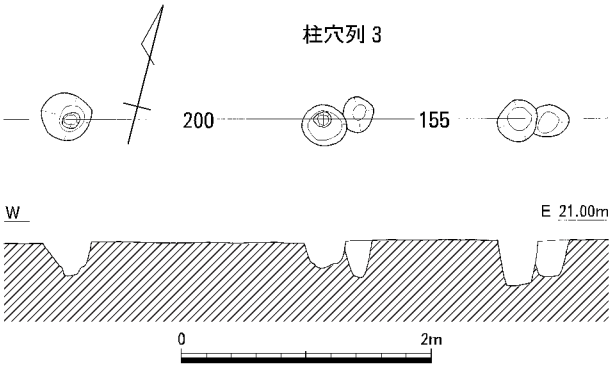
掘立柱建物５（第９図）

２区北方、１区との境に位置する。１間×２間の掘立柱建物である。桁行401㎝、梁間165㎝を測る。柱穴の掘り方は円形で、直径は30～38㎝、残存する深さは20～53㎝である。４本の柱穴で柱痕が確認でき、直径15～17㎝を測る。柱間距離は南北153～165㎝、東西194～207㎝。棟の主軸はＮ－82°－Ｅで、棟方向はほぼ東西であるが、建物４や建物３とは軸方向が若干異なる。出土遺物には、土師器破片の他に、輸入磁器と思われる破片がある。２がそれで、椀の口縁部である。時期は近世ではあるが、ほかの建物とは若干時期差のあるものと思われる。



第９図　掘立柱建物５・柱穴列１（1/60）・同出土遺物（1/4）





第10図　柱穴列２・３（1/60）

柱穴列１（第９図）

３区中央北側に位置する。主軸方向はＮ－74°－Ｅである。１・２区で検出された近世の建物とは平行関係にない。地形の違いによるものであろうか。柱穴は４本並び、掘り方の平面は円形で、直径35～43㎝である。残存する深さは40～65㎝、柱間は201～288㎝を測る。出土遺物のうち、**３**は土師器小皿で、底部糸切り。ほかに備前焼の破片がある。この柱穴列の時期は近世と考えられる。

柱穴列２（第10図）

３区ほぼ中央北側に位置する。主軸方向はＮ－77°－Ｅである。１・２区で検出された近世の建物とは平行関係にない。柱穴は３本あり、掘り方の平面は円形である。直径25～32㎝、残存する深さは35～55㎝を測る。柱間は286～315㎝を測る。出土遺物は中世と思われる土師器や備前焼の破片であるが、埋土の状況から時期は近世と考えられる。

柱穴列３（第10図）

３区ほぼ中央北側に位置する。主軸方向はＮ－67°－Ｅである。１・２区で検出された近世の建物とは平行関係にない。柱穴は３本あり、掘り方の平面は円形である。直径32～39㎝、残存する深さは20～35㎝、柱間は155～200㎝を測る。出土遺物はないが周辺の状況から、この柱穴列の時期は近世と考えられる。

（小松原）

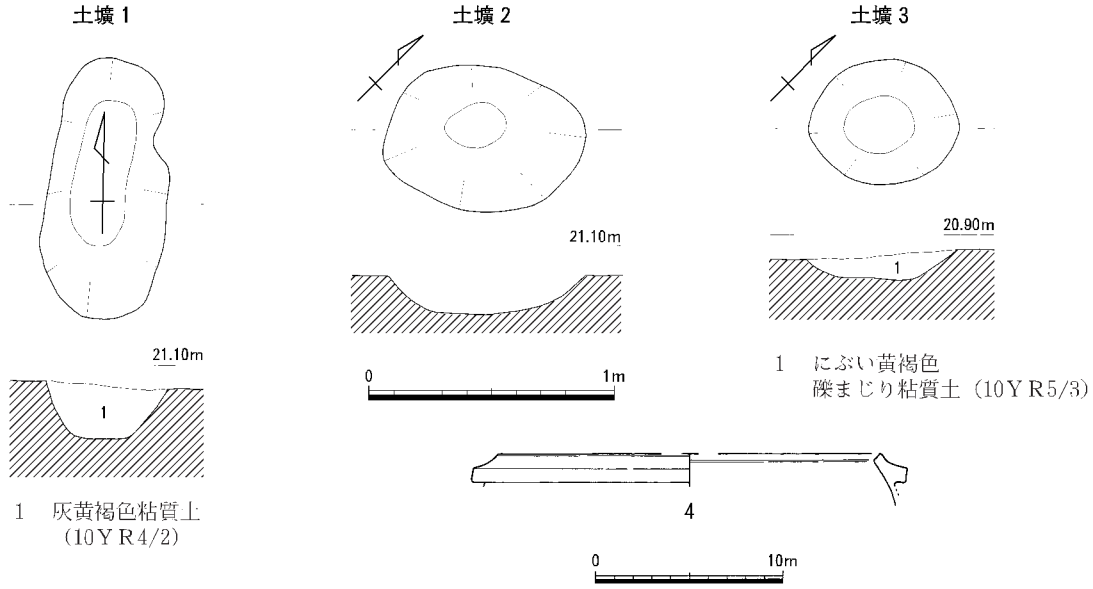
２　土壙

土壙１（第11図）

１区北で検出された。溝15の北端に位置する。南北105㎝、東西50㎝の不整楕円を呈する。断面は逆台形、残存する深さは24㎝を測る。出土遺物は中世のものが多い。**４**は瓦質土器の鍋。埋土の土質・色調から時期は近世と考えられるが、溝15との重複関係は不明である。

土壙２（第11図）

２区中央やや北寄りに位置する。建物５の西1.5ｍで検出された。平面の形状は楕円を呈する。長径82㎝、短径60㎝。断面は皿状を呈する。残存する深さは15㎝を測る。出土遺物は少量で図示できるものはない。時期は近世と考えられる。



第11図　土壙１～３（1/30）・同１出土遺物（1/4）

土壙３（第11図）

３区のほぼ中央に位置する。平面の形状はほぼ円形で、長径60㎝、短径50㎝を測る。断面は皿状を呈し、残存する深さは10㎝を測る。埋土の状況などから時期は中世と考えられる。　　（小松原）

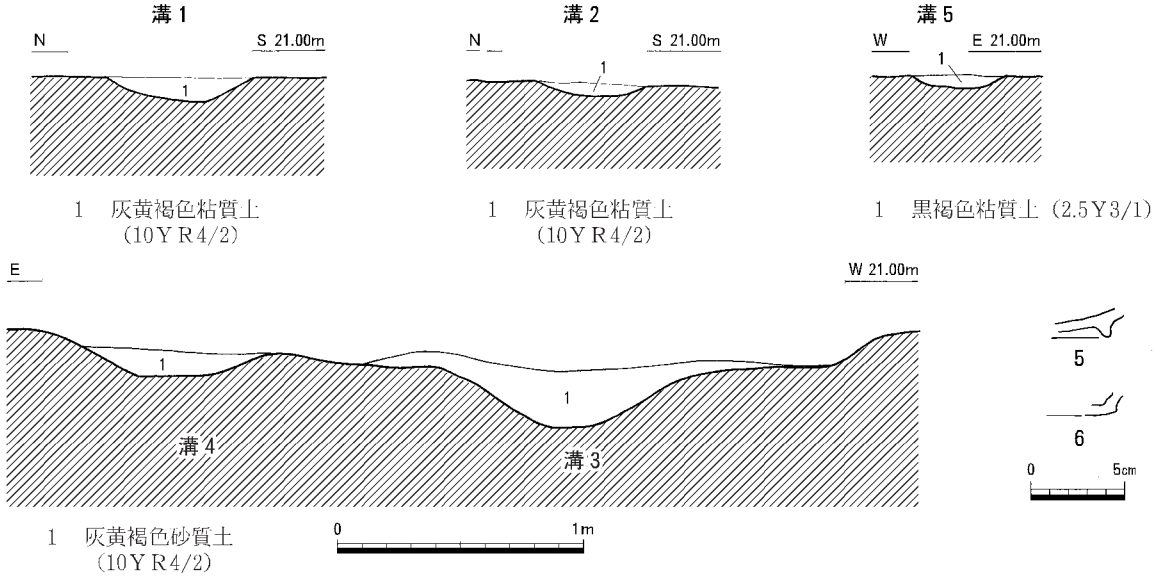
３　溝

溝１（第12図）

３区東端に位置する。東西に走る溝で、幅59㎝、残存する深さは９㎝を測る。断面の形は皿状を呈する。出土遺物のうち、５・６は土師器破片。溝の時期は判然としないが、溝３に切られているので溝３より古い。中世から近世にかけてのものと考えられる。

溝２（第12図）

３区東端に位置し、溝１の南0.8ｍで検出された。溝１と同様に東西に走る溝であるが、東端では



第12図　溝１～５断面（1/30）・同１出土遺物（1/4）

二又に分かれている。幅は44㎝、残存する深さは５㎝を測る。断面の形は皿状を呈する。出土遺物は少量で図示できるものはない。埋土の土質・色調が溝１と共通なので、時期は溝１とほぼ同時期と考えられる。

溝３（第12図）

３区の東端、溝１・溝２の西で検出された。南北に走る溝で、幅185㎝、残存する深さは11㎝を測る。調査区内の南端で大きくくぼむ。出土遺物は少量で図示できるものはない。溝の時期は判然としないが、中世から近世にかけてのものであろう。溝１・溝２を切っているのでそれらの溝よりは新しい。

溝４（第12図）

３区の東端で検出された。溝３の西0.6ｍに位置する。溝３と平行して南北に走る溝である。幅62㎝、残存する深さは９㎝を測る。断面の形は皿状を呈する。出土遺物はない。３区南側壁の堆積状況や埋土の状況から、近世のものと考えられる。

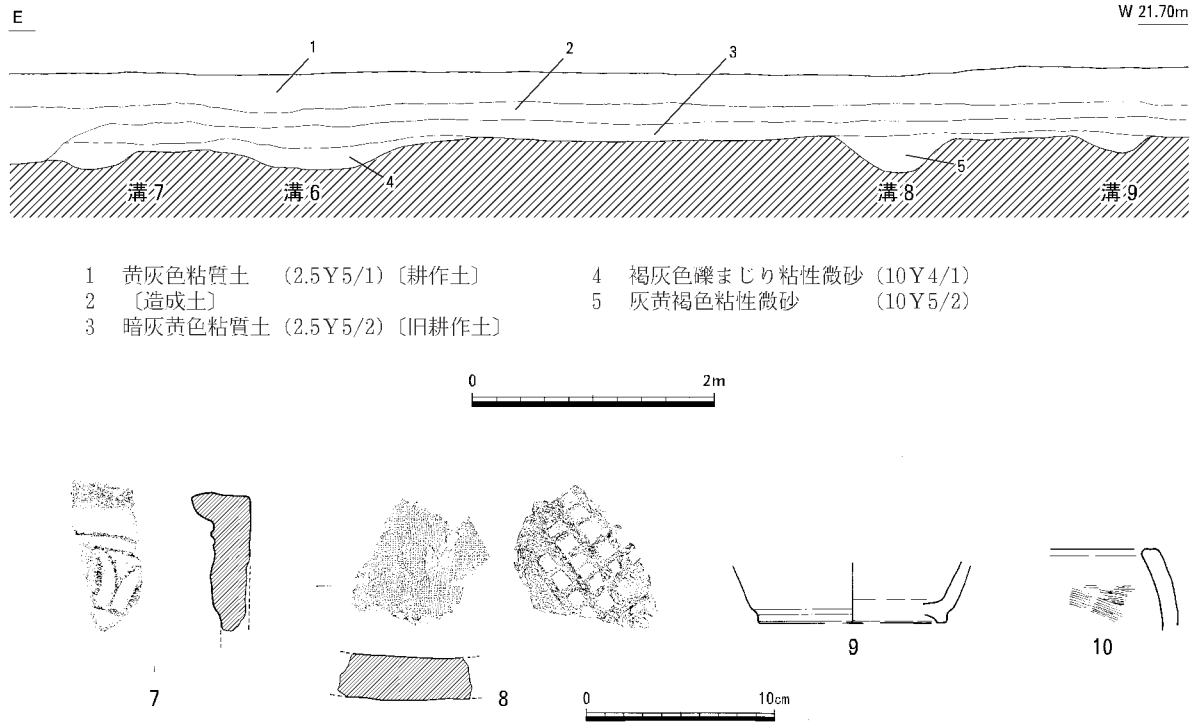
溝５（第12図）

３区の東方で検出された。溝４の西0.6ｍに位置する。幅は最大で76㎝、残存する深さは10㎝を測る。断面の形は皿状を呈する。溝４にとりつくと考えられる。出土遺物は無い。埋土の土質・色調から溝の時期は近世と考えられる。

溝６（第13図）

３区西端で検出された。幅は約150㎝、深さは15㎝を測る。断面の形は皿状を呈する。出土遺物は**９**や**10**など古代から中世にかけてのものが見られる。溝８と平行に走るが、埋土が全く異なり、この溝の時期は近世と考えられる。

溝７（第13図）



第13図　溝６～９断面（1/60）・同６・８出土遺物（1/4）

３区西端、溝６のすぐ東で検出された。溝６と並行して走る南北溝である。幅は推定90㎝、深さは13㎝である。断面の形は皿状を呈する。出土遺物は溝６と同じく古代から中世にかけてのものが見られる。埋土の土質・色調も共通しているため、時期も溝６と大差なく近世の範囲に入るものと考えられる。

溝８（第13図）

１区東端に位置する。ほぼ南北に走る溝で、幅75㎝、深さは28㎝を測る。断面の形は皿状を呈する。すぐ西隣に平行して溝９が走り、さらに西側には方位を同じくする建物１が存在する。溝８は吉岡廃寺の伽藍配置中軸線の延長上に位置しており、建物１などと合わせて寺院と何らかの関連を有する施設か、寺院廃絶後この地に受け継がれた施設、例えば吉岡荘に関連する施設とも考えられる。７や８など吉岡廃寺の瓦が出土しているが、埋土の土質・色調からこの溝の時期は中世の範囲と考えられる。

溝９（第13図）

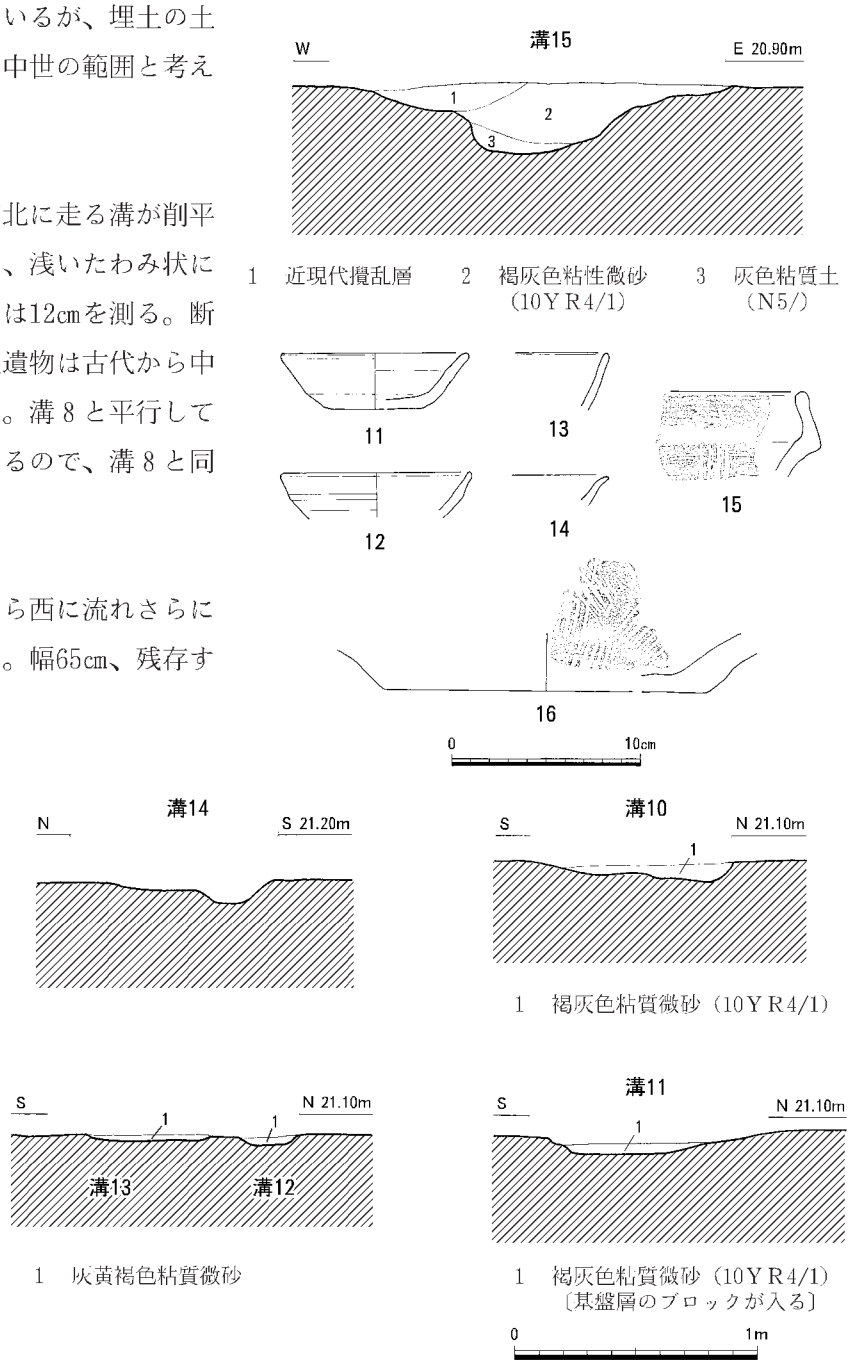
１区東端で検出された。南北に走る溝が削平により途切れ途切れになって、浅いたわみ状に残ったものとみられる。深さは12㎝を測る。断面の形は皿状を呈する。出土遺物は古代から中世にかけてのものが見られる。溝８と平行して走っており、埋土も共通であるので、溝８と同時期のものと考えられる。

溝10（第14図）

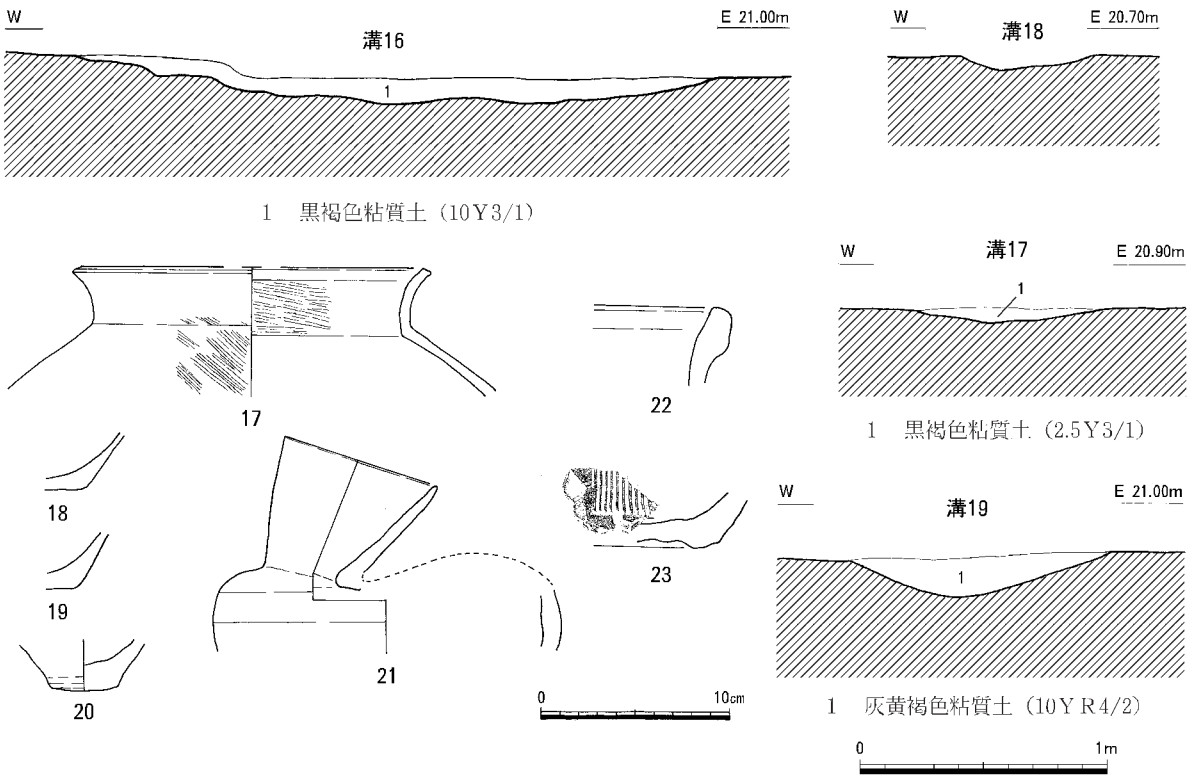
１区の北方に位置し、東から西に流れさらに南に屈曲して溝11に合流する。幅65㎝、残存する深さは６㎝と非常に残りの浅い溝である。断面の形は皿状を呈する。出土遺物は少量で図示できるものはない。埋土の色調などから近世のものと考えられる。圃場整備前の畦畔と重複しており、近現代の水田の区画に踏襲されたようである。

溝11（第14図）

１区北方に位置し、東西に走る溝である。約１ｍ北を同方向に走り南に屈曲する溝10と合流する。溝10と同様に非常に浅い溝で、幅



第14図　溝10～15断面（1/30）・同15出土遺物（1/4）



第15図　溝16～19断面（1/30）・同16出土遺物（1/4）

75～80㎝、残存する深さは５㎝を測る。断面の形は皿状を呈する。出土遺物は少量で図示できるものはない。時期は溝10と同様に近世のものと考えられる。

溝12・13（第14図）

１区北で検出された浅い溝である。溝12・13が東西方向に平行して走り、西端で溝15にとりつく。残存する深さは２～３㎝を測る。断面の形はいずれも皿状を呈する。出土遺物は中・近世のものが少量。時期は近世と考えられるが溝15より新しい。

溝14（第14図）

１区北西に位置し、東西に走る溝である。幅60㎝、残存する深さは９㎝を測る。残存状態が悪く、途切れ途切れになりながら東端は溝15にとりつく。出土遺物は少量。溝の時期は近世と考えられる。

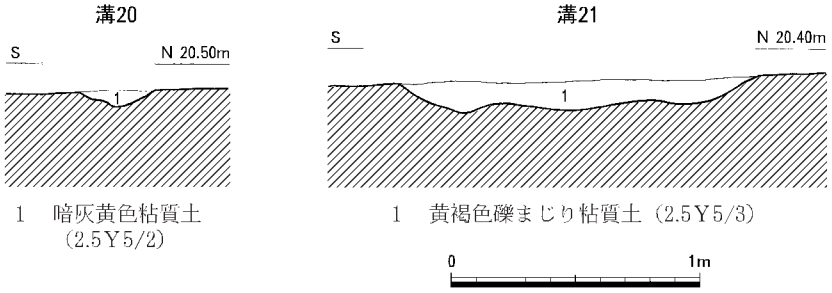
溝15（第14図）

１区中央を南北に走る溝である。幅140～150㎝、残存する深さは28㎝を測る。一部近現代の攪乱を受けている。調査区内で20ｍにわたって検出されたが、北端は土壙１にとりつくが重複関係は不明であった。東は溝12・13にとりつき、西は溝14にとりつくようである。溝12・13・14とともに圃場整備前の畦畔に踏襲され、近世以降の水田区画を復元できる。出土遺物は**11～16**であるが、このうち**13・14**は青磁、**15・16**は備前焼の擂鉢であるが時期幅があるようである。埋土の土質・色調から、この溝の時期は近世と考えられる。

溝16（第15図）

１区西に位置する不定形のたわみ状の溝である。北から南に走る自然流路の痕跡のようにみえる。調査区内では南北15ｍにわたって検出された。幅は最大で３ｍ程度、残存する深さは深いところで30

cmを測る。断面の形は不定形を呈する。出土遺物は**17**～**21**などで、中には**17**などの弥生土器も見られる。**21**の須恵器の平瓶がこの溝の底で見つかったことから、この溝の時期は古代と考えられる。



第16図　溝20・21断面（1/30）

溝17（第15図）

２区南方に位置する。南北に走る溝の一部と考えられるが、削平を受け、浅くたわみ状に残るものである。幅約80cm、残存する深さ６cmを測る。出土遺物は古代のものが見られるが、埋土の状況からこの溝の時期は近世と考えられる。

溝18（第15図）

２区南方に位置し、溝19の東１ｍで検出された。削平を受けて浅くたわみ状に残存するのみである。途切れ途切れではあるが溝19に並行して走る。幅は54cm、残存する深さは最深で６cmを測る。出土遺物は少量で図示できるものがない。時期は判然としないが、溝19と埋土も共通しているので、同時期のものと考えられる。

溝19（第15図）

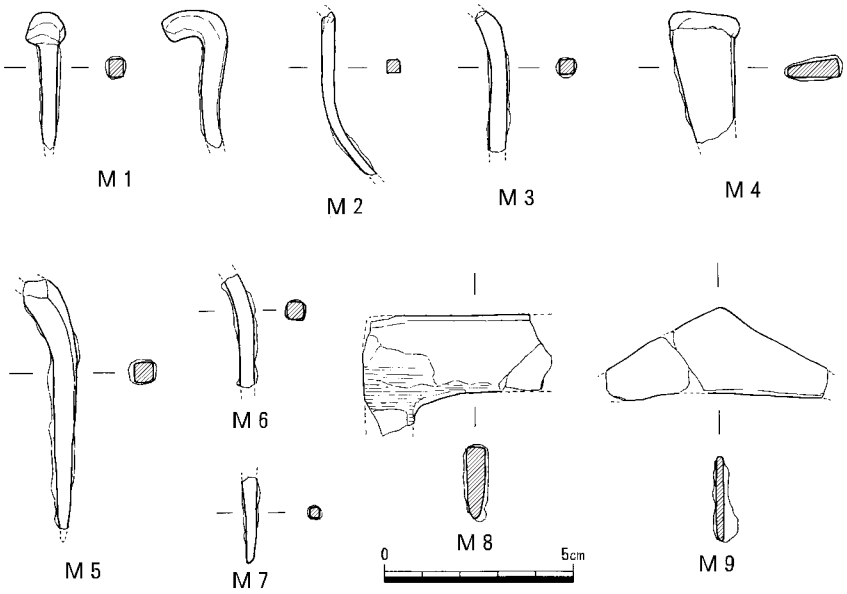
２区南西部に位置する。ほぼ南北に走る溝であるが、削平により浅く約12mにわたり残存するのみである。幅105cm、残存する深さ18cmを測る。断面の形は皿状を呈する。出土遺物は**22**・**23**の備前焼などが見られる。この溝の時期は判然としないが、中世から近世にかけてのものであろう。

溝20（第16図）

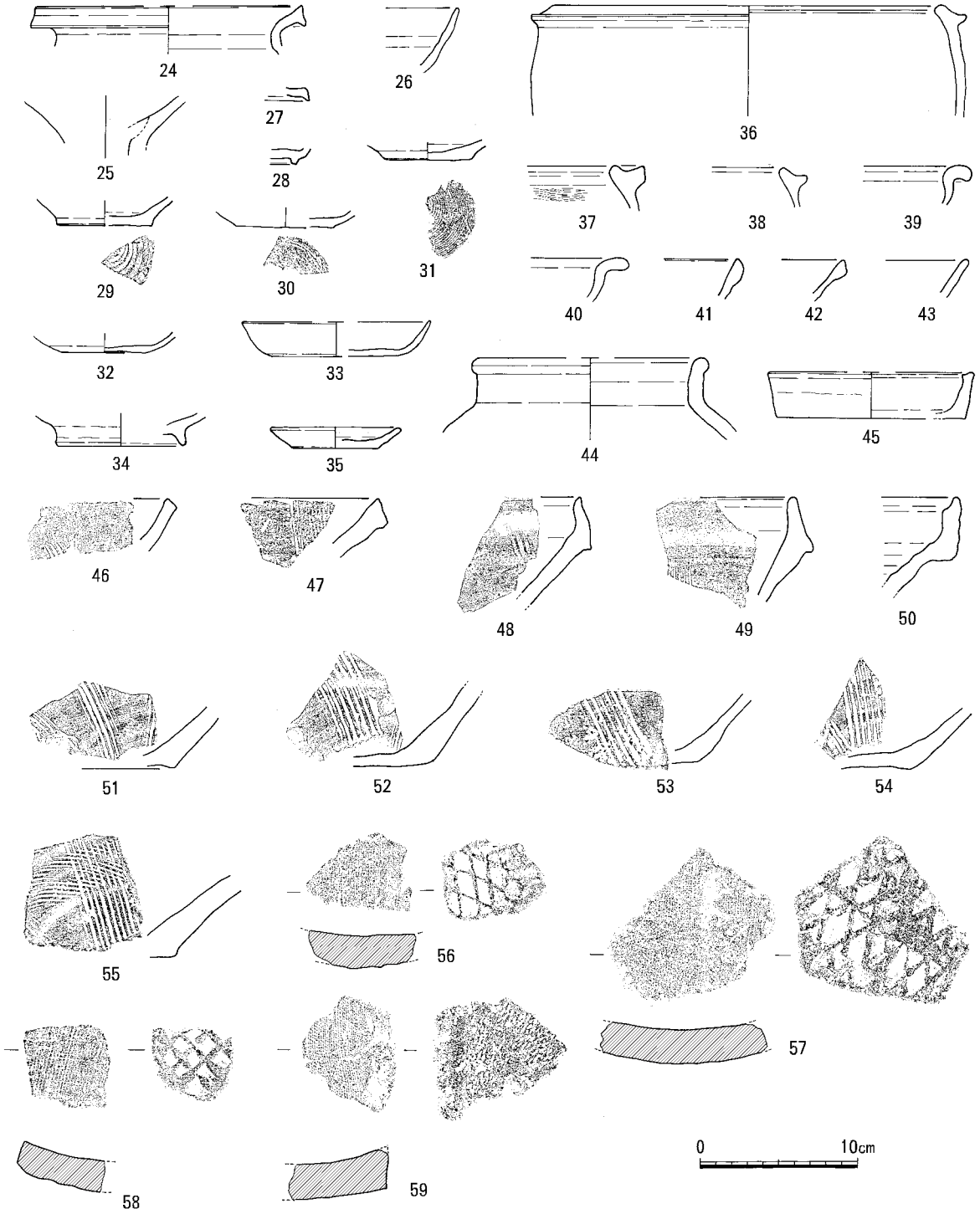
２区南西隅に位置する。ほぼ東西方向に走る溝であるが、ごく一部しか残存していない。幅は約30cm、残存する深さは７cmを測る。断面の形は皿状を呈する。出土遺物はないが、埋土の土質・色調から、この溝の時期は近世と考えられる。

溝21（第16図）

２区南西隅に位置する。ほぼ東西方向に走る溝で、幅約140cm、残存する深さは12cmを測る。断面の形は皿状を呈する。出土遺物は古代から中世にかけてのものが見られる。溝20に平行するが、埋土の状況からこの溝の時期は中世の範囲と考えられる。　（小松原）



第17図　出土鉄器（1/2）



第18図　その他の出土遺物（1/4）

4　その他の出土遺物

柱穴、包含層等から弥生時代後期から中近世の土器・瓦・鉄器が出土している。古代に属する遺物は少なく、瓦片も暗渠等の再利用からの出土が多い。中世の遺物では、白磁青磁・備前焼等の陶磁器、土師質の鍋、皿、須恵質の碗等が出土している。量的には備前焼の擂鉢片が目に付く。　（山磨）

第３章　まとめ

当該遺跡は、昭和56年度に圃場整備事業に伴い確認調査を行い保存措置を講じた、白鳳時代創建の吉岡廃寺の南側に隣接する場所である。吉岡廃寺は確認調査前には、田の畦畔に塔心礎が残り周辺から瓦の出土や西側の森井池北東岸に瓦窯が推定されている程度であった。調査の結果、塔跡以外の遺構の残存状況は悪く、瓦溜まりや溝等から方一町程度の寺域と法隆寺式の伽藍配置が推定された。

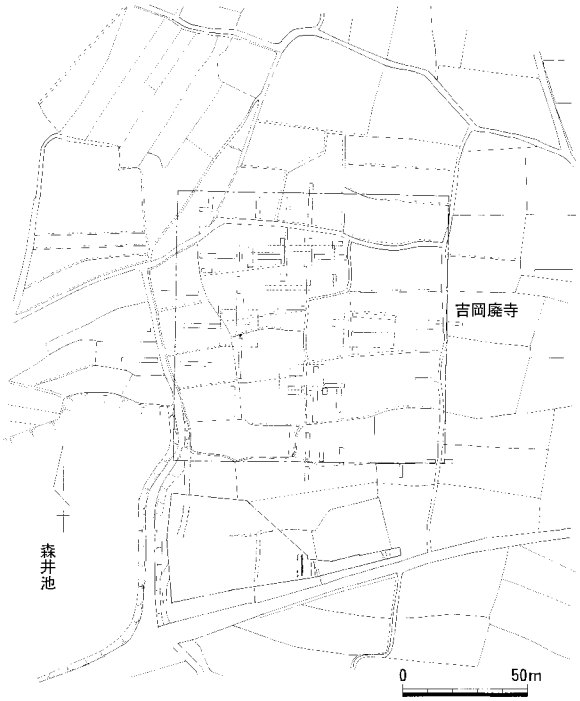
今回の調査は、主要地方道佐伯長船線の道路建設が吉岡廃寺推定寺域南側の市道との間に建設される事に伴うものであった。そのため、調査遺跡は、吉岡廃寺と同時期の遺構の存在が期待されたことから調査時には吉岡廃寺関連遺跡と呼称していた。

発掘調査開始時の調査区の状況は、圃場整備事業により東西100ｍ、南北45ｍ規模の一枚の田面をなしていた。昭和50年代前半の圃場整備前の地形図では、南北に４枚と東西に３枚の小区画された田面をなし、田の高低差は、南北が１ｍ、東西が50cmほどで、南北に大きく傾斜のある地形が読み取れた。調査の結果、調査区北端は、圃場整備事業によりかなり削平を受けていたものの、北から南に緩く傾斜する自然地形と中世を中心とする包含層が認められた。遺構検出面は、調査区北端で海抜21.1ｍ、南端で20.5ｍ程度であった。

検出遺構は、掘立柱建物５棟、柱穴列３列、溝21条、土壙３基、柱穴等であった。このうち、２区で検出した不定形な自然流路とみられる溝16をのぞき、埋土の堆積状況や出土遺物等から中世後半から近世初頭の時期で、吉岡廃寺の存続と同時期の明瞭な遺構は検出できなかった。

このうち、時期は下るものの廃寺関連として唯一検討可能な遺構は、１・３区の境に検出の溝６～９の溝群である。この溝群は吉岡廃寺推定寺域の中軸南延長線上の想定南門から南に40ｍ付近に位置している。しかし、これら溝群のうち溝６・７は、埋土等から近世以降の水田区画の掘削と判明した。また、溝８・９は出土遺物に瓦、須恵器の細片を含むものの、断面、埋土の観察等から中世の堆積層で、いずれも寺院の存続期の古代まで遡らないものであった。ただ、想定寺域の南北中軸線上に重複した溝群の掘削は、南北方向の区画が長期間にわたり踏襲した結果と想定され、廃寺の中門に向かう参道等の痕跡の可能性も考えられる。

吉岡廃寺の確認調査結果では、遅くとも平安時代始めには廃絶したと考えられている。今回の調査では、出土遺物等から寺院廃絶後やや間を置いた中世後半期から近世にかけて、周辺に集落が形成されていたことが明らかとなった。　（山磨）



第19図　吉岡廃寺と調査地位置図（1/3,000）

遺構一覧表
遺物観察表

遺構一覧・遺物観察表

凡　例

1　遺構一覧

柱穴列

・軸方向は、主軸線と座標北との差を記している。

・規模は、総長を表す。

掘立柱建物

・規模は、身舎の桁行と梁間の間数、桁行総長、梁間総長をそれぞれ表す。

・柱間は、身舎の桁行と梁間における柱間距離の最大・最小を表す。

・面積は、建坪の面積を表す。

・棟方向は、身舎の主軸方位を表す。

土壙・溝

・規模は、検出面での長さ・幅・深さを表す。ただし、幅、深さに関しては断面が壁面で観察できるものについては、これを表す。

・規模のうち、（　）は推定値を表す。

・平面形は、検出面での形状を表す。

2　遺物観察表

土器・瓦

・法量のうち（　）は、残存値を表す。口径項目中の（　）は、その残存率が1/6以下であることを表す。

・色調は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。

金属製品

・法量は、長さ・幅・厚さの最大値を表す。（　）は残存値であることを表す。

・重量のうち（　）は、残存重量であることを表す。

表２　遺構一覧・遺物観察表

掘立柱建物一覧表

遺構名	規模	柱間距離(cm)		南北(cm)	東西(cm)	面積(㎡)	棟方向	時期	旧番号
		南北	東西						
掘立柱建物１	１×３	318～326	147～201	326	498	16.2	E-1°-N	中世～近世	No.４
掘立柱建物２	１×１	194～199	227	199	229	4.6	E-0°-N	中世～近世	No.20
掘立柱建物３	１×３	435～445	207～238	445	678	30.1	E-6°-N	近世	No.22
掘立柱建物４	１×５	420～425	197～220	425	1050	44.6	E-5°-N	中世～近世	No.15
掘立柱建物５	１×２	153～165	194～207	165	401	6.6	E-8°-S	中世～近世	No.21

柱穴列一覧表

遺構名	規模(cm)	柱穴距離(cm)	軸方向	時期	備考	旧番号
柱穴列１	695	201～288	E-16°-N	中世		No.36
柱穴列２	601	286～315	E-23°-N	中世	重複	No.38
柱穴列３	355	155～200	E-13°-N	中世	重複	No.37

土壙一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧番号
土壙１	不整楕円	逆台形	105	50	24	近世	No.９
土壙２	楕円	皿状	82	60	15	近世	No.24
土壙３	円	皿状	60	50	10	近世	No.34

溝一覧表

遺構名	上端幅(cm)	断面形	深さ(cm)	時期	備考	旧番号
溝１	59	皿状	9	中世		No.29
溝２	44	皿状	5	中世		No.30
溝３			11	近世		No.31
溝４	65	皿状	9	近世		No.32
溝５	50	皿状	10	近世		No.33
溝６	175	皿状	15	近世		No.18
溝７		皿状	15	近世		No.19
溝８	75	皿状	14	中世		No.１
溝９	80	皿状	16	中世		No.17
溝10			28	近世		No.８
溝11	65		9	近世		No.16
溝12		皿状	3	近世	重複	No.11
溝13		皿状	2	近世	重複	No.10
溝14	100	皿状	6	近世	重複	No.２
溝15	80	皿状	5	近世	重複	No.３
溝16	270	皿状	30	古代	自然流路	No.12
溝17	80	皿状	6	近世		No.28
溝18	85	皿状	6	近世		No.23
溝19	100	皿状	18	近世		No.27
溝20		皿状	7	近世		No.25
溝21		皿状	12	中世		No.26

鉄器観察表

掲載番号	実測番号	出土遺構他	器　種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備　考
				最大長	最大幅	最大厚				
M1	16	溝16	釘	(37.2)	(4.65)	(6.7)	(3.23)	鉄	古代	
M2	11-1	排土	釘	(44.7)	(3.5)	(3.5)	(1.91)	鉄	中世～近世	
M3	6	検出中	釘	(37.0)	(5.0)	(4.04)	(2.88)	鉄	中世～近世	
M4	12	P58	楔	(35.0)	(15.7)	(5.0)	(5.97)	鉄	中世	
M5	9	南東拡張部	釘	(68.0)	(6.6)	(5.2)	(7.55)	鉄	中世～近世	
M6	11-2	掘立柱建物４・P55	釘	(31.6)	(5.0)	(5.0)	(1.78)	鉄	中世～近世	
M7	5	掘立柱建物１・P2	釘	(23.35)	(4.55)	(4.95)	(0.64)	鉄	中世	
M8	13	P63	鎌	(50.0)	(32.2)	(5.25)	(13.22)	鉄	中世	木質残存
M9	2	壁面清掃中	火打ち鎌	(58.65)	25.2	2.55	(10.18)	鉄	中世～近世	

土器・瓦観察表

掲載番号	実測番号	出土遺構他	種　別	器種	実測(cm)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備　考
					口径	底径	器高			
1	46	掘立柱建物4	土師器	皿	10.0	6.7	1.6	にぶい橙5YR7/4	底部：ナデ？	P68
2	34	掘立柱建物5	磁器	皿	14.0			明緑灰10GY8/1	染付	P53
3	48	柱穴列1	土師器	皿	9.3	6.0	1.7	灰白10YR8/2	底部：糸切り後ナデ	P69
4	26	土壙1	瓦質土器	鍋	20.2			暗灰N3/1		
5	59	溝1	土師器	椀				黄灰2.5Y6/1		
6	60	溝1	土師器	杯				にぶい褐7.5YR5/4		
7	1	溝8	瓦	軒丸				オリーブ黒5Y3/1	古岡廃寺7類	
8	30	溝8	瓦	平瓦				灰N5	格子目タタキ	
9	52	溝16	須恵器	杯		10.0		灰N6		
10	54	溝16	瓦質土器	鍋				黒褐10YR3/1		外：煤付着
11	11	溝15	備前焼	杯	9.6	5.4	3.0	にぶい褐7.5YR5/3	底部：糸切り	
12	12	溝15	備前焼	杯	9.8			にぶい赤褐2.5YR5/4		
13	13	溝15	青磁	碗	13.6			暗オリーブ灰2.5GY4		
14	14	溝15	青磁	碗				灰オリーブ7.5Y6/2		
15	10	溝15	備前焼	鉢				灰赤10R4/2		
16	9	溝15	備前焼	鉢			17.4	灰褐5YR4/2	斜めカキメ	
17	40	溝16	弥生土器	甕	18.0			にぶい黄橙10YR7/3	内：ナデ	
18	39	溝16	弥生土器	底部				浅黄橙10YR8/4		
19	42	溝16	弥生土器	底部	0.0			灰黄2.5Y7/2		
20	38	溝16	弥生土器	底部		3.9		にぶい黄橙10YR7/2		
21	33	溝16	須恵器	平瓶	8.4			灰白5Y7/17/2		自然釉
22	45A	溝19	備前焼	甕				暗褐7.5YR3/3		
23	45B	溝19	備前焼	鉢				暗褐7.5YR3/3		
24	27	暗渠	弥生土器	甕	17.0			灰白5Y7/1		
25	41	包含層	弥生土器	高坏				にぶい黄橙10YR7/3	円板充填	
26	20	P39	土師器	杯				にぶい橙7.5YR7/4		
27	16	P17	須恵器	杯蓋				灰N6		
28	15	P10	須恵器	杯		11.8		灰N5	高台付	
29	36	包含層	須恵器	椀		6.0		灰N6	底部：糸切り	
30	21	P40	土師器	杯		6.2		にぶい橙7.5YR7/4	底部：糸切り	
31	50	表土	須恵器	椀		5.6		灰白N7	底部：糸切り	
32	19	P26	土師器	杯		5.4		灰白10YR8/2	底部：糸切り？	
33	18	P24	土師器	杯	12.0	8.0	2.2	にぶい黄橙10YR7/3	底部：糸切り	
34	23	包含層	土師器	椀		8.0		にぶい黄橙10YR7/3		
35	61	表土	土師器	皿	8.1	5.6	1.3	橙5YR6/6		
36	35	包含層	瓦質土器	鍋	24.5			オリーブ黒5Y3/2		雲母多い
37	51	包含層	瓦質土器	鍋	28.8			灰N4		
38	17	P18	瓦質土器	鍋				灰N5		
39	24	包含層	瓦質土器	鍋				にぶい黄橙10YR7/2		
40	37	暗渠	土師質土器	鍋				黒褐10YR3/1		
41	57	造成土	白磁	碗				灰白2.5Y8/2		
42	56	造成土	白磁	碗				灰白N8		
43	58	造成土	青磁	碗	10.1			灰白N8		
44	22	包含層	備前焼	壺	14.0			赤褐10YR4/4		
45	62	包含層	備前焼		12.8	12.0	2.9	灰赤2.5YR4/2		サヤ？
46	53	包含層	備前焼	鉢				灰褐5YR4/2		
47	7	P30	備前焼	鉢				にぶい赤褐2.5YR4/3		
48	2	P22	備前焼	鉢				暗赤灰2.5Y3/1		
49	55	包含層	備前焼	鉢				にぶい赤褐2.5YR4/3		
50	3	P16	備前焼	鉢				暗赤灰10R3/1		
51	43	包含層	備前焼	鉢		13.5		灰褐7.5YR5/2	使用磨滅痕	
52	4	包含層	備前焼	鉢				灰赤2.5YR5/2	使用磨滅痕	
53	5	P11	備前焼	鉢				褐灰7.5YR5/1		
54	8	包含層	備前焼	鉢				にぶい赤褐2.5YR5/4		
55	44	包含層	備前焼	鉢				灰赤7.5R4/2	カキメ斜め	
56	29	包含層	瓦	平瓦				灰黄2.5Y7/2	格子目タタキ	
57	28	暗渠	瓦	平瓦				灰7.5Y6/1	格子目タタキ	
58	32	包含層	瓦	平瓦				にぶい黄褐10YR7/4		
59	49	表土	瓦	平瓦				灰N5		

１　調査区遠景
（南西上空から）

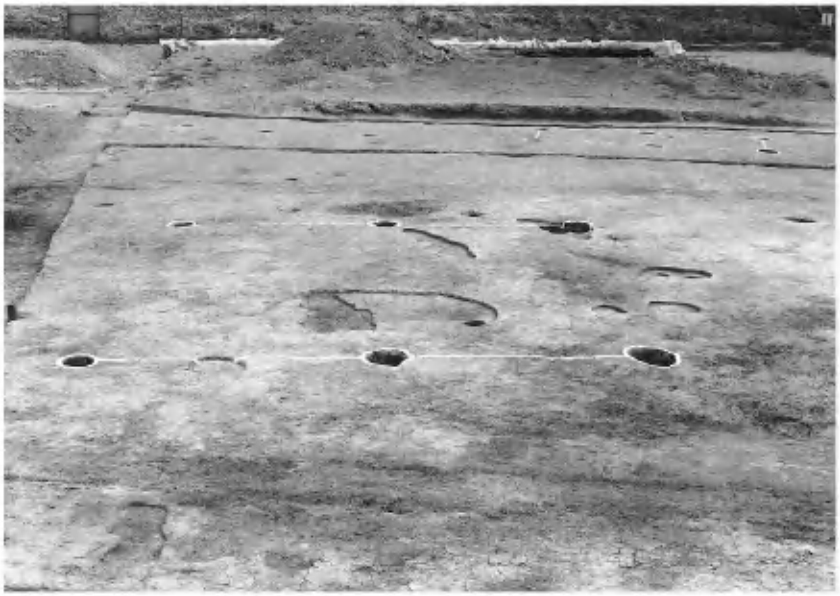
２　１区遺構全景
（北上空から）

図版２

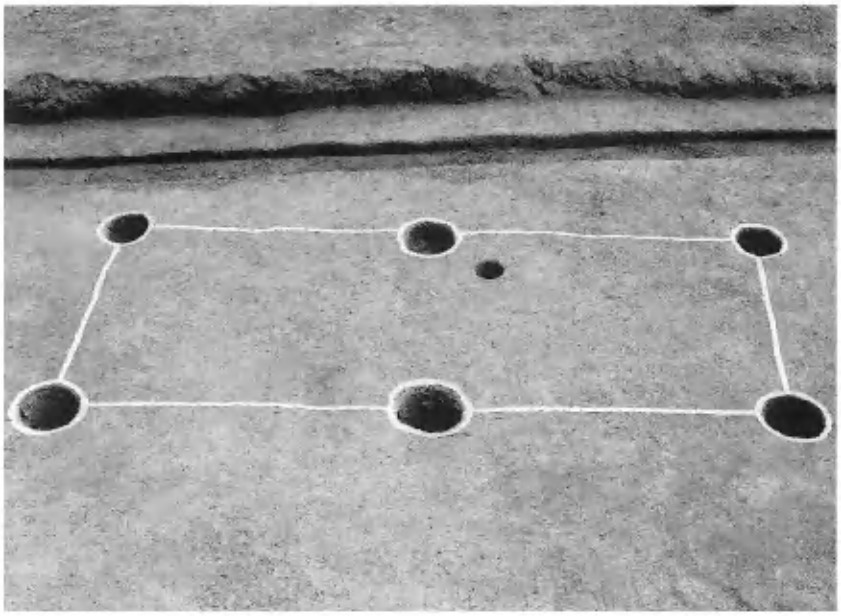
１　２区北遺構全景
（西から）

２　２区南遺構全景
（西から）

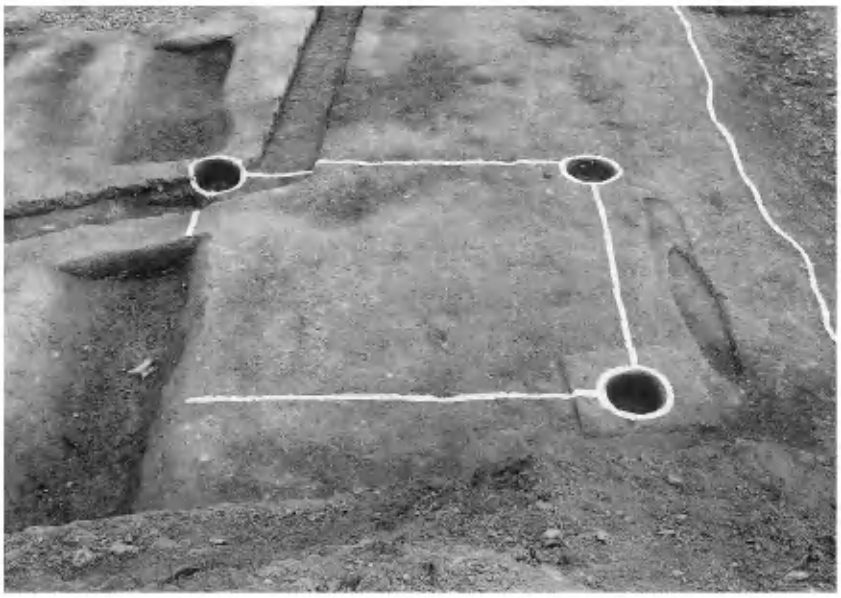
３　３区遺構全景
（南東から）



１　掘立柱建物３
（北から）

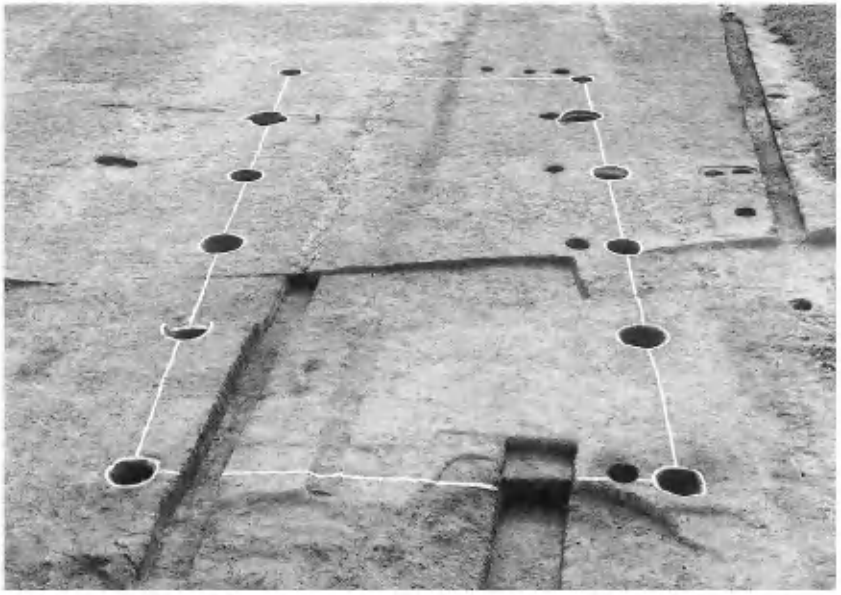


２　掘立柱建物５
（北から）

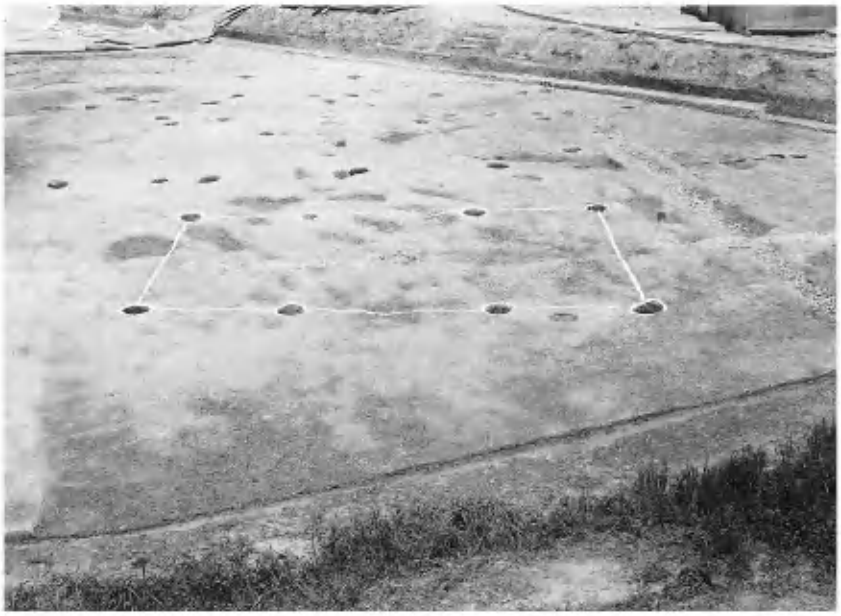


３　掘立柱建物２
（南から）

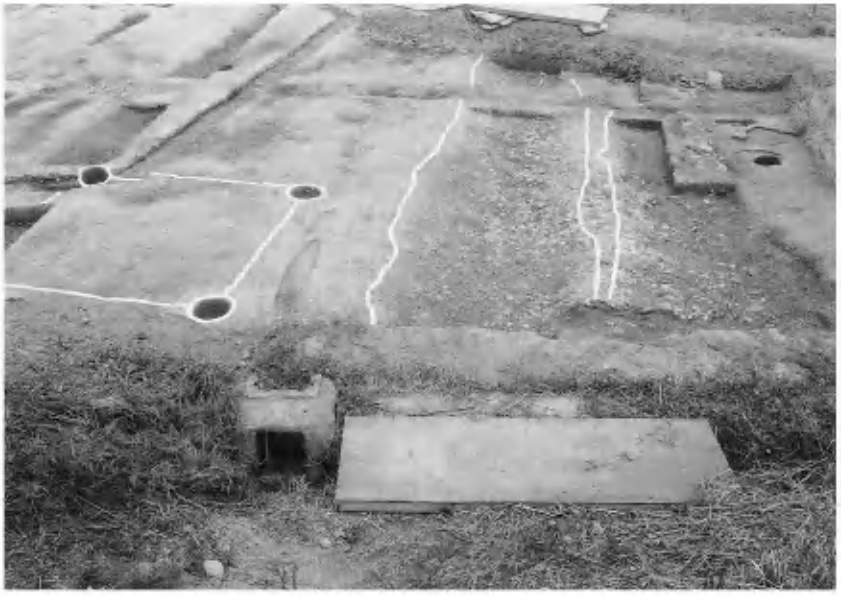
図版４



１　掘立柱建物４
（東から）



２　掘立柱建物１
（南から）



３　掘立柱建物２
溝６・７
（南から）

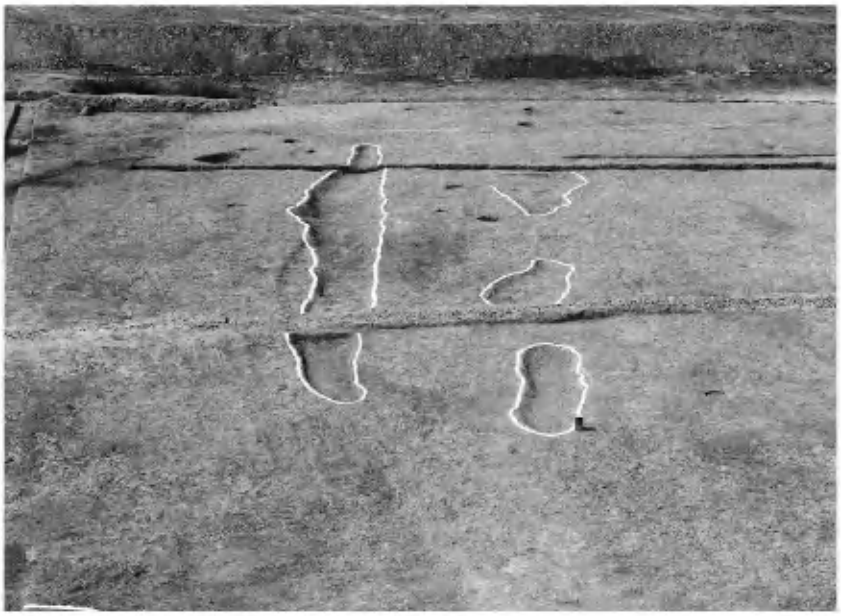
１　溝８・９付近
（南から）

２　溝10～15付近
（北から）

３　溝21
（西から）

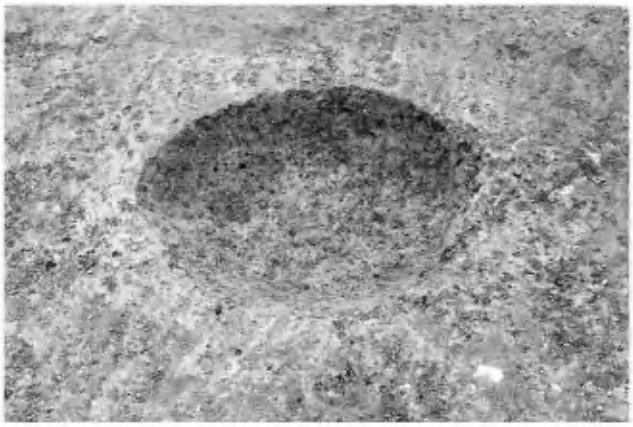
図版６

１　溝16
（南から）



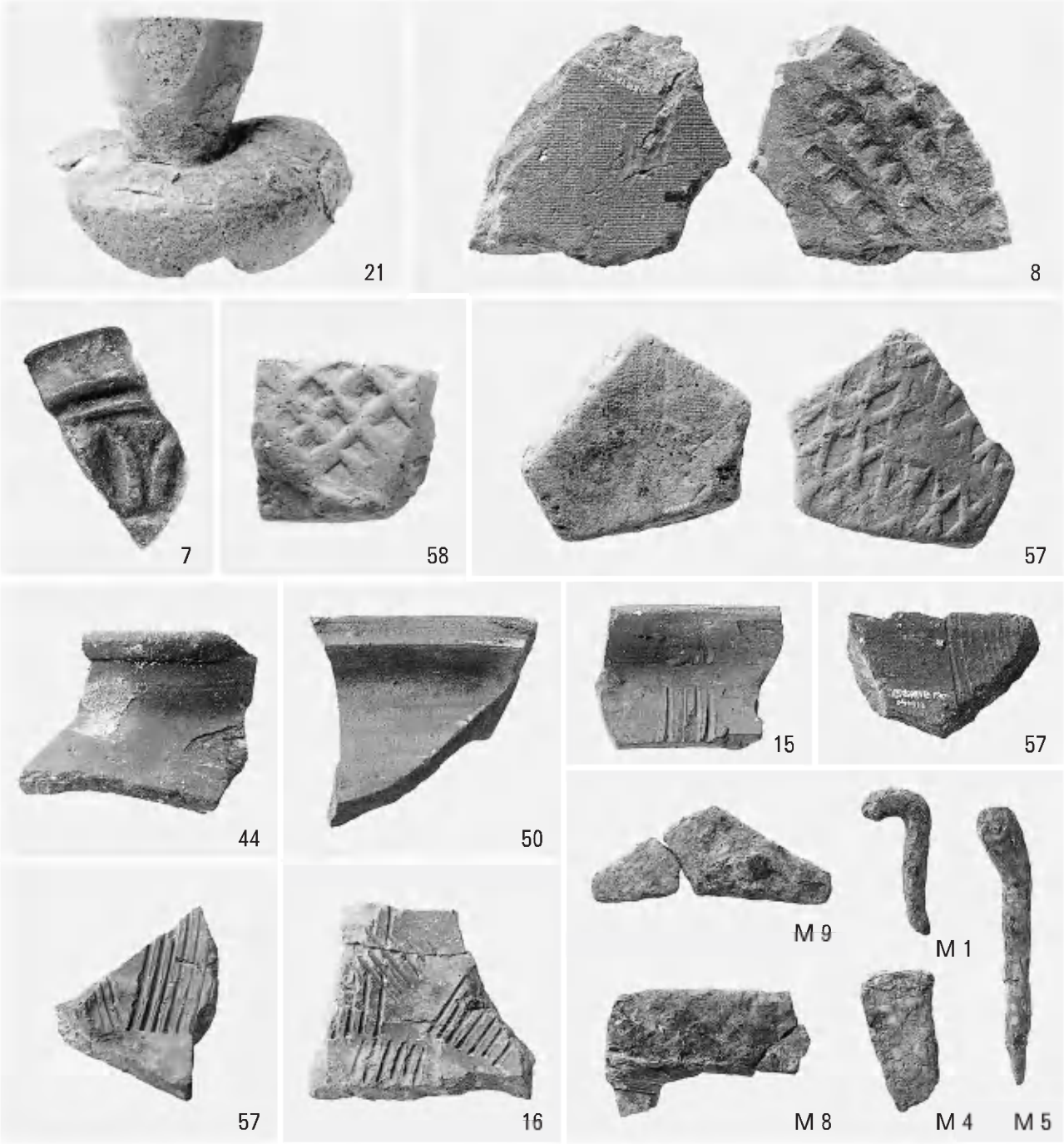
２　溝18・19
（南から）

３　溝１～５
（南西から）



1　土壙３（北西から）

2　溝３・４断面（北から）



３　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しおのもりいさきいせき
書名	塩納森井先遺跡
副書名	主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査
巻次	5
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	211
編著者名	山磨康平・小松原基弘・平井泰男
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111
発行年月日	2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
しおのもりいさきいせき 塩納森井先遺跡	おかやまし 岡山市 せとちょう 瀬戸町 しおの 塩納 230ほか	33201	332012726	34度 45分 45秒	134度 3分 56秒	20050401～ 20050930	1,900	道路改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塩納森井先遺跡	集落	古代 中世 近世	掘立柱建物 5 土壙 3 溝 21	土師器 須恵器 陶磁器 土製品 石器 瓦 鉄滓	中近世の集落

要約	塩納森井先遺跡は、昭和56年度に圃場整備事業に伴い確認調査を行い、保存措置を講じた白鳳時代創建の吉岡廃寺の南側に位置する。調査時には吉岡廃寺と同時期の遺構の存在が期待されたことから吉岡廃寺関連遺跡と呼称していた。 調査の結果は、吉岡廃寺の存続と同時代の遺構は明瞭に検出できず、2区で検出の自然流路が古代に遡る可能性がある程度であった。そのほかの掘立柱建物、柱穴列、溝、土壙等は中世後半から近世にかけての時期であった。なお、調査区は、圃場整備により北半部では削平を受けていたものの、南半部では、南に緩く傾斜する自然地形と中世の包含層が認められた。 遺物は、中世末を中心に弥生土器から近世の陶磁器まで出土している。廃寺に関連する遺物では瓦類があり、そのうち吉岡廃寺7類に分類される軒丸瓦片が1点出土している。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 211

塩納森井先遺跡

主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査 5

平成19年 3 月20日　印刷
平成19年 3 月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷　株式会社 三門印刷所
岡山市高屋116-7

R100
本文用紙は古紙配合率100%再生紙を使用しています。